天城町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

県営畑地総合土地改良事業「第二天城北部地区・第二天城南部地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 鬼入塔遺跡・長竿遺跡

１９８９年３月

鹿児島県大島郡天城町教育委員会

# 序　　文

近年、地域開発が急ピッチで進められていますが、開発区域内にある貴重な文化財を保護し、子孫に継承することは私たちの義務といえます。

県営畑地帯総合土地改良事業に係る調査で見つかった鬼入塔遺跡及び長竿遺跡を、国、県補助事業として、天城町教育委員会が主体となって発掘調査を実施いたしました。

この報告書によって、町民の方々に埋蔵文化財をご理解いただくと共に、広く文化財に対して深い関心を寄せられ、文化財保護にご協力をいただくように期待するところです。

発刊にあたり、確認調査、発掘調査及び報告書の発刊に至るまでご尽力をいただいた、鹿児島県教育庁文化課職員及び作業員、その他関係の方々に深く感謝申し上げます。

平成元年３月

天城町教育委員会

教育長　盛　岡　平　作

# 例　　言

1　本報告書は、天城町教育委員会が実施した県営畑地総合土地改良事業に伴う鬼入塔遺跡・長竿遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査の組織は、調査の経過の中で記した。

3　本書で用いたレベル数値は、すべて海抜高である。

4　遺物番号は、鬼入塔遺跡・長竿遺跡で通し番号を付し、遺物番号と本文中の番号･図版番号は同一である。

5　本書の執筆分担は以下のとおりで、編集は中村・牛ノ濱が行った。

第Ⅰ章、第Ⅱ章第３節、第Ⅳ章……中　村

第Ⅱ章第１節・第２節、第Ⅲ章、第Ⅴ章……牛ノ濱

# 本　文　目　次

序　文

例　言

第Ⅰ章　調査の経過 …… 5
　第1節　調査に至るまでの経過…… 5
　第2節　調査の組織…… 5
　第3節　調査の経過…… 6

第Ⅱ章　遺跡の位置および環境 …… 7
　第1節　遺跡の位置および環境…… 7
　第2節　遺跡周辺の歴史的環境…… 8
　第3節　天城町管内の遺跡…… 10

第Ⅲ章　層　位 …… 16

第Ⅳ章　鬼入塔遺跡の調査 …… 18
　第1節　調査の概要…… 18
　第2節　遺　構…… 18
　第3節　トレンチ調査…… 20
　第4節　小　結…… 25

第Ⅴ章　長竿遺跡の調査 …… 26
　第1節　調査の概要…… 27
　第2節　遺　構…… 27
　第3節　トレンチ調査…… 30
　第4節　小　結…… 31

# 挿　図　目　次


第１図　天城町管内遺跡地図……付図
第２図　玉城遺跡出土遺物……11
第３図　馬塔遺跡・戸ノ木
遺跡採集遺物……12
第４図　大久保遺跡採集遺物……12
第５図　平土野原遺跡採集遺物……12
第６図　塔原遺跡採集遺物……13
第７図　鍋窪遺跡採集遺物……13
第８図　鍋窪遺跡採集遺物……13
第９図　千間遺跡採集遺物……14
第10図　模式柱状図……16
第11図　鬼入塔遺跡周辺地形図
及びトレンチ配置図……17
第12図　第４トレンチ平面図及び断面図…19
第13図　第３トレンチ出土遺物実測図……20
第14図　第１・２・３トレンチ断面図……20
第15図　第４トレンチ出土遺物実測図……21
第16図　第５・６・７トレンチ断面図……22
第17図　第9･10トレンチ出土遺物実測図…22
第18図　第８・９・10・11・
12トレンチ断面図…23
第19図　第13・14・15・16
トレンチ断面図……24
第20図　表面採集遺物実測図……25
第21図　昭和62年度採集遺物実測図……26
第22図　長竿遺跡周辺地形図及び
トレンチ配置図……27
第23図　長竿遺跡土層断面図……28
第24図　遺物実測図（1）……29
第25図　遺物実測図（2）……30


# 図　版　目　次


図版１―①　鬼入塔遺跡遠景　②　第２トレンチ……31
図版２―①　第４トレンチ近景　②　第４トレンチ調査風景……32
図版３―①　第４トレンチ（南から）　②　第４トレンチ（北から）……33
図版４―①　第５トレンチ　②　第６トレンチ……34
図版５―①　第８トレンチ　②　第10トレンチ……35
図版６―①　第11トレンチ　②　第13トレンチ……36
図版７―①　第２・４トレンチ出土遺物　②　第９・10トレンチ出土遺物……37
図版８―　鬼入塔遺跡採集遺物……38
図版９―①　長竿遺跡近景（南から）　②　長竿遺跡近景（東から）……39
図版10―①　長竿遺跡第１トレンチ　②　長竿遺跡第２トレンチ……40
図版11―①　長竿遺跡第３トレンチ　②　昭和62年度採集遺物　③　古銭……41
図版12―①　長竿遺跡出土遺物……42

# 第Ⅰ章　調査の経過

## 第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下文化課とする）は、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るため、開発関係各期間に対しては、工事着工前に当該事業区内における文化財の有無、およびその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部農地整備課（徳之島土地改良出張所）は、天城町内において「県営畑地総合土地改良事業（第二天城北部地区・第二天城南部地区）」の計画策定にあたり、文化財の有無について文化課に照会した。

文化課はこれを受けて、昭和62年５月、昭和63年３月に当該地区の文化財分布調査を天城町教育委員会社会教育課と実施した。

この分布調査の結果、２地区に土器の散布地が認められた。このため事業着工前に遺跡の範囲・性格等を把握するための確認調査を実施することとなった。

確認（発掘）調査は、国及び県の助成を得て、天城町教育委員会社会教育課が調査主体となり、調査は県文化課に依頼した。

## 第２節　調査の組織

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 調査主体者 | 天城町教育委員会 | | | |
| 調査責任者 | 〃 | 教　育　長 | | 坂田元一郎 |
| 調 査 事 務 | 〃 | 社会教育課 | 課長 | 新納　哲武 |
| | 〃 | 〃 | 企画係長 | 蔵園　義美 |
| | 〃 | 〃 | 社会教育主事 | 南　　文夫 |
| | 〃 | 〃 | 〃 | 吉岡　武美 |
| | 〃 | 〃 | 社会教育指導員 | 久　　善造 |
| 調査担当者 | 鹿児島県教育庁 | 文　化　課 | 主査 | 牛ノ濵　修 |
| | 〃 | 〃 | 〃 | 中村　耕治 |
| 調査指導者 | 鹿児島県文化財保護審議会委員 | | | 河口　貞徳 |

なお、天城町平土野郵便局勤務の義憲和氏には地名の考証等について教示を得、熊本大学文学部考古学研究室の白木原教授・甲元助教授には周辺遺跡分布調査の資料転載を快く許可していただいた。

また、調査の企画等において、県教育庁文化課長・吉井浩一、同課長補佐・奥園義則、同主幹・立園多賀生、同文化財研究員兼埋蔵文化財係長・吉元正幸、同企画助成係長・京田秀允・同係の各氏の指導・助言を得た。

## 第３節　調査の経過

発掘調査は、昭和63年７月18日から同年８月12日まで行ったが、経過は日誌抄により以下略述する。

７月18日(月)　天城町着。教育委員会にて打合せ。徳之島土地改良出張所及び教育事務所徳之島出張所にあいさつ。現地にて発掘方法の検討。用具点検。

７月19日(火)　鬼入塔遺跡発掘調査開始。発掘方法等諸注意及び説明。１～３トレンチ設定後掘下げ、３トレンチより青磁、白磁出土

７月20日(水)　１～３トレンチ掘下げ。

７月21日(木)　１～３トレンチ掘下げ。４・５トレンチ設定後掘下げ。４トレンチにて落ち込みが確認され拡張する。

７月22日(金)　４トレンチ掘下げ。１～３トレンチ断面実測後、埋め戻し。

７月23日(土)　４トレンチ掘下げ、平板実測。５トレンチ断面実測後埋め戻し。

７月25日(月)　６・７トレンチ設定後掘下げ。

７月26日(火)　６・７トレンチ掘下げ、断面実測後埋め戻し。８トレンチ設定後掘下げ。

７月27日(水)　８トレンチ掘下げ。９・10トレンチ設定後掘下げ。義憲和氏来跡。

７月28日(木)　８～10トレンチ掘下げ。４・８トレンチ断面実測。大島教育事務所里山雅一指導主事来跡。

７月29日(金)　９・10トレンチ断面実測。４・10トレンチ埋め戻し。

８月 1日(月)　９トレンチ埋め戻し。長竿遺跡に用具運搬。

８月 2日(火)　長竿遺跡発掘調査開始。１・２トレンチ設定後掘下げ。

８月 3日(水)　１・２トレンチ掘下げ。文化課吉井課長・吉元係長来跡。

８月 4日(木)　１・２トレンチ掘下げ。３トレンチ設定後掘下げ。

８月 5日(金)　２・３トレンチ掘下げ。１～３トレンチ断面実測。長竿遺跡発掘調査終了。

８月 6日(土)　雨の為、作業中止。徳之島土地改良出張所にて長竿遺跡の取り扱いについて、協議する。

８月８日(月)　鬼入塔遺跡に用具運搬、調査再開。11・12トレンチ設定後掘下げ。

８月 9日(火)　13・14トレンチ設定後掘下げ。午後雨の為作業中止。

８月10日(水)　15・16トレンチ設定後掘下げ。11・12トレンチ断面実測後、埋め戻し。13・14トレンチ断面実測。

８月11日(木)　15・16トレンチ断面実測後、埋め戻し。13・14トレンチ埋め戻し。鬼入塔遺跡発掘調査終了。

8月12日(金)　教育委員会及び徳之島土地改良出張所にて鬼入塔遺跡の取り扱いについて協議する。徳之島発。遺物を収蔵庫へ。

# 第Ⅰ章　遺跡の位置及び環境

## 第１節　遺跡の位置及び自然環境

徳之島は南西諸島の中央やや北よりにある。東側は太平洋に、西側は東シナ海に面し、東北に大島本島、南西に沖永良部の島影が望める。鹿児島から 468kmの海上にあり、周囲84km、面積 248㎢で南北に細長い長方形の島であり、大島郡天城町・伊仙町・徳之島町からなっている。

地質構造上、南西諸島は外帯、中央帯、内帯の３グループに大別される。外帯は種子島、喜界島、沖縄本島中南部などで、第三紀層や洪積層などの比較的新しい地層からなり、内帯はトカラ列島、鳥島、久米島等の霧島火山帯に属する火山島である。徳之島は屋久島、大島本島、沖永良部島、与論島とともに中央帯に属し、古生層や中生層の古い地層からなり、またこれらを貫いて噴出した花崗岩もみられる。同じ中央帯の島々でも、地形・地質はだいぶ相違がある。沖永良部島、与論島が隆起珊瑚礁におおわれた低平な島であるのに対し、大島本島は古生層の陥落島で山が海に迫り、低地が乏しい。中間にある徳之島は地形も中間的で、中央部は大島本島のように山地であり、周囲にはそれを取り巻くように広大な隆起珊瑚礁が発達し、海岸段丘を形成している。この山地をとりまく隆起珊瑚礁は、海岸地帯に発達している隆起珊瑚礁より生成が古いので、琉球石灰岩とよばれ、厚いところでは 100m を越えている。琉球石灰岩の表面は、国頭礫層とよばれるうすい砂礫や粘土が覆っている。天城町の南部から伊仙町にかけて島の西岸が 100m 程の段崖で海に落ち込んでいるのに対し、島の東岸は、山、花徳の一部を除いてほとんど全面に隆起珊瑚礁が発達している。

天城町は徳之島の西部から北西部に位置し、東は徳之島町、南は伊仙町に接し、西・北は東シナ海に面している。東西８km、南北16kmで南北に細長く、総面積は 84.80㎢である。北東から南東にかけて、一連の山岳によって囲まれ、北から天城岳、三方通（さんそんつじ）岳、大城岳、馬鞍（まくら）岳、大和城山、美名田（みなだ）山、井之川岳、剝（はげ）岳の諸峰が徳之島町との境界を、犬田布岳とその山麓を流れるウワナル川が伊仙町との境界をなしている。これらの山地はいわゆる古生層で、粘板岩、砂岩、礫岩、結晶片岩、花崗岩などからなっている。

町名の由来は郷土誌によると雨気岳（あめきで）〔天城岳〕に由来すると記載されている。

鬼入塔遺跡は大字浅間字鬼入塔に所在する遺跡である。遺跡の所在する浅間は町の北部にあり、東部は天城連山の馬鞍岳山麓で、西海岸は珊瑚礁の浅瀬が発達している。浅間とは海と浅瀬にちなんだ地名と考えられ、古くから塩炊き浜として有名である。遺跡は天城連山から海へ向かって傾斜している段丘上にあり標高は50～65m である。

長竿遺跡は大字瀬滝字長竿に所在する遺跡である。遺跡の所在する瀬滝は町の南部に位置し、南は蛇行して西流する秋利神川（徳之島最長の13km）の大峡谷を隔てて西阿木名、北は大字大津川に接し、西は東シナ海に面する。西部には広大な台地があり、サトウキビ畑が海辺の段崖まで続く。遺跡はこの台地上にあり標高は75～80m である。

## 第２節　遺跡周辺の史的環境

南西諸島の中でもここ徳之島は遺跡の多いところで知られている。また、遺跡の調査も奄美諸島の中で一番最初に行ったことで有名であり、1928年（昭和３）面縄貝塚の発見以来、地元の研究者をはじめ、県内外の研究者や行政関係者によって学術調査や重要遺跡確認調査が実施され、貴重な資料が報告されている。そこで周辺地域とあわせて主な遺跡を若干紹介したい。

奄美大島で考古学の記録が最初にあらわれるのは、1982年（明治25）若林勝邦による「種子島及大島の石斧」に始まる。その後、昭和３年面縄尋常小学校の訓導大村行長が面縄第１貝塚を発見し，昭和５年夏広瀬祐良[1]、同年秋に小原一夫が調査[2]を[3]行っている。小原一夫はその時第２貝塚を発見している。昭和10年三宅宗悦が第１・２貝塚[4]を調査している。その後、河口貞徳は昭和28年第２貝塚を調査し、翌29年には現在第３貝塚と命名されている兼久貝塚を調査[5]している。同年８月には三友国五郎・国分直一が第２貝塚を調査[6]し、第４貝塚を発見している。昭和31年には、九学会連合で第２・４貝塚を調査[7]し、遺物を縄文時代と設定している。昭和57年・59年に伊仙町教育委員会は、これらの成果を考慮して遺跡保護の充実を図る為、国及び県の補助事業として第１～４貝塚の発掘調査を行った[8]。第１貝塚からは爪形文、市来式、兼久式等と多くの貝製品が出土し、洞穴内からは弥生時代の箱式石棺墓が検出されている。第２貝塚からは敷石住居跡が検出され，遺物は嘉徳式土器が多くの貝製品と出土している。砂丘上に形成された遺跡である。第３貝塚は兼久式、面縄前庭式を出土する貝塚である。第４貝塚は面縄前庭式、面縄東洞式、面縄西洞式の標式遺跡である。このように、面縄貝塚は南西諸島の考古学史的にも遺跡としても重要な貝塚である。

喜念貝塚も古くより調査された遺跡として知られている。昭和８年広瀬祐良が、同10年三宅宗悦が調査[4]し、昭和31年には九学会連合で発掘調査が実施され[7]ている。遺物は宇宿上層式、嘉徳式、喜念Ⅰ式、石斧、磨石、貝製品、人骨、貝札等が出土し、縄文時代から弥生時代の重要な遺跡であることが確認されている。現在も遺物が採集され、一部崩壊等をうけている所もあり保護対策が必要な遺跡である。

喜念貝塚約１km北東部には、人骨が出土した喜念原始墓が知られている。昭和９年県道工事で発見され、その時、広瀬祐良が貝輪を採集し、翌10年１月三宅宗悦の調査で、多くの貝製品・骨器・土器と10数体の人骨が確認[9]された。昭和62年、県道拡幅工事により当地が工事区域にはいる為、国・県の補助事業として発掘調査を行った。その結果、３ケ所の葬所が検出され骨製品・貝製品を共伴する人骨も検出されて喜念クバンシャ岩陰墓と名称された[10]。

昭和57年の面縄貝塚発掘以来、伊仙町では遺跡の確認作業が国・県の補助事業として年次的に行われるようになった。

犬田布貝塚もその一つで、昭和47年地元の岩井正一によって発見され、地元や島外の人々に注目される遺跡であった。昭和58年伊仙町教育委員会によって調査[11]され、縄文時代晩期から弥生時代にかけての重要な貝塚であることが判明し、平成元年県指定となった。面縄西洞式・犬田布式・喜念Ⅰ式・宇宿上層式土器や多くの貝製品・骨角器が出土し、徳之島では見られない

鹿の角やシレナシジミなどがあり、交易の広さを考えさせてくれた遺跡であった。

また、昭和58年には南西諸島最大の謎の一つであった類須恵器の窯跡が地元の四本延宏によって発見された[12]。カムィヤキの小字名に着眼された結果であった。同59年伊仙町教育委員会で発掘調査した結果、窯跡は二つの群に分かれ、第1支群で10ケ所の窯跡・灰原、第2支群で7ケ所の窯跡が確認された。この窯跡で焼かれた種類も甕・壺・鉢・椀と多種に渡り、南西諸島の一大工房跡として脚光をあびた[13]。

翌60年には、カムィヤキ古窯跡より南約 300m にあるヨヲキ洞穴の調査[14]を行い、縄文時代後期から弥生時代までの土器と貝玉・貝鏃・黒曜石などが出土した。また、この調査の際、洞穴の北側で6ケ所の灰原と1ケ所の焼土が見つかり、ヤナギダ古窯跡と名称された。

このように、徳之島での考古学の調査は伊仙町に集中した感じであった。しかし以前より奄美諸島の調査を積極的に手がけていた熊本大学考古学研究室は、昭和60年夏当町の玉城遺跡を調査し[15]、同時に周辺遺跡の分布調査を行い、多大な成果をあげた。

また、徳之島でも大型の開発事業が計画され、県文化課は、昭和63年徳之島全域の分布調査を行い[16]、開発と文化財保護の両立を計っているところである。これらの結果、徳之島南部に集中していると考えられていた遺跡が島全体で発見されることとなった。

## 引用文献


註1　広瀬祐良『昭和8年度調査　郷土史研究　徳ノ島ノ部』　1933

2　小原一夫「奄美大島群島徳之島貝塚に就いて」史前学雑誌第4巻3・4号　1932

3　大山柏・小原一夫「奄美大島群島徳之島貝塚遺物」史前学雑誌第5巻5号　1933

4　三宅宗悦・藤岡謙次郎「徳之島出土の貝塚土器に就いて」考古学第11巻5号　1940

5　河口貞徳「南島先史時代」南方産業科学研究所報告第1巻2号　1956

6　三友国五郎・国分直一「徳之島面縄貝塚調査報告」古代学第8巻2号　1959

7　九学会連合「奄美大島の先史時代」『奄美その自然と文化』　1959

8　伊仙町教育委員会『面縄貝塚群』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書4　1985

9　三宅宗悦「大隅国徳之島喜念原始墓出土貝製品及び出土人骨の抜歯に就いて」考古学雑誌第33巻10号　1943

10　伊仙町教育委員会『喜念原始墓他』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書7　1988

11　伊仙町教育委員会『犬田布貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書2　1984

12　義憲和・四本延宏「亀焼古窯」鹿児島考古18　1984

13　伊仙町教育委員会『カムィヤキ古窯跡群Ⅰ・Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書3・5　1985

14　伊仙町教育委員会『ヨヲキ洞穴』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書6　1986

15　熊本大学文学部考古学研究室『玉城遺跡』　1985

16　鹿児島県教育委員会『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅰ』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書49　1989

## 第３節　天城町管内の遺跡

天城町内における遺跡の分布状況は、1985年発行の鹿児島県市町村別遺跡地名表では大城跡・大和城跡・玉城跡の３箇所が記載されているが、鹿児島大学の上村俊雄氏は同年３月発行の「南日本文化第17号」『徳之島の先史時代』で新たに千間遺跡・塔原遺跡等７遺跡を紹介された。この他、1985年には熊本大学文学部考古学研究室により玉城遺跡の発掘調査が実施され、報告書も刊行されている。また、調査と並行して分布調査・聞き取り調査も行われ数箇所の遺跡が新たに確認された。その後、鹿児島県教育庁文化課により農地開発に伴う分布調査、奄美地区埋蔵文化財分布調査が実施され数箇所の遺跡が確認されている。以上最近の調査を加えると天城町管内の遺跡は20箇所を数える。以下、資料化されているものを中心に概要を述べるがその多くは、熊本大学文学部考古学研究報告の「玉城遺跡(付　周辺遺跡分布調査)」によるものである。

### １．大城跡（フーグスク）（天城松原字大城山）

徳之島町との境界をなす大城山の頂上付近にあり、馬蹄形の平坦面と土塁状の施設および平坦面を取り囲む石垣状の石積み等がある。

### ２．大和城跡（ヤマトグスク）（天城字当山）

大和城山の頂上付近にあったとされているが、頂上付近は第２次世界大戦時に高射砲陣地が構築されたため、地形が変形して、旧地形は残されていない。

### ３．玉城跡（タマグスク）（天城字真瀬名）

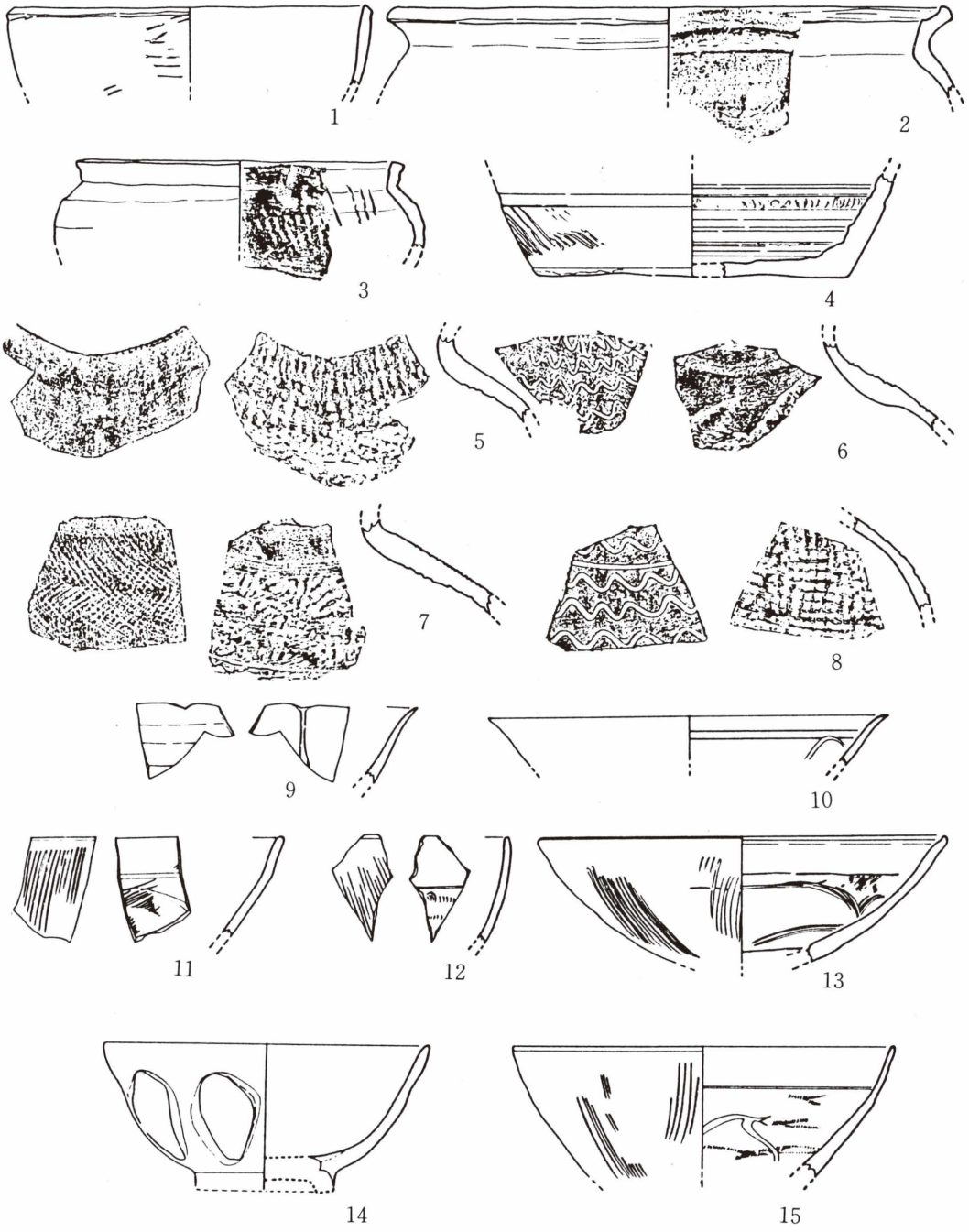
玉城遺跡については熊本大学考古学研究室の活動報告19「玉城遺跡」において詳しく報告されているのでここでは略述する。調査では４組の遺構が確認され、遺物もカムィヤキ窯系の陶片を中心に白磁・青磁・陶器・染付・土器片等が出土し、その年代も13～14世紀の可能性が大きいことが指摘されている。

### ５．馬塔遺跡（マトウ）（岡前馬塔）

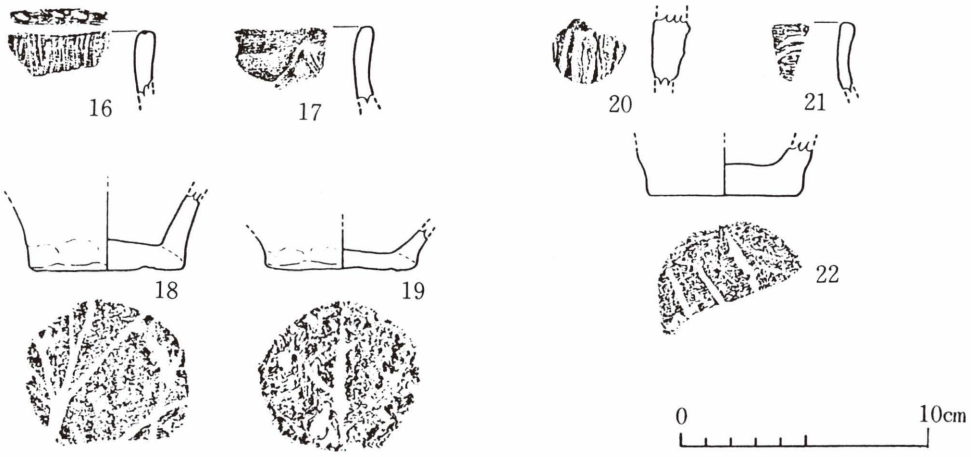
中川の北にある標高約５ｍの砂丘上に位置する遺跡で、地表下約２ｍの赤土層が遺物包含層と考えられる。土器には底部に木ノ葉の圧痕を有するものが見られるなど兼久式に相当するものがふくまれる。

### ８．戸ノ木遺跡（岡前戸ノ木）

浅間の西側の海岸近くの標高約５ｍの砂丘にある遺跡である。昭和53年発行の天城町誌では岡前川津部遺跡として紹介されているものと同一遺跡であると思われる。砂採取や耕地整理・天地返し等により相当の破壊を受けている。遺物は兼久式土器を中心に採集されている。




**第2図　玉城遺跡出土遺物**（熊本大学報告より）　0　10cm



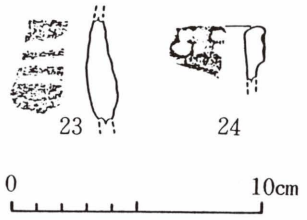

**第3図　馬塔遺跡・戸ノ木遺跡採集遺物**（熊本大学報告より）

**10．オガミヤマ遺跡**（岡前オガミヤマ）

標高約30mの独立丘陵上にある遺跡で一部は削り取られている。その壁断面において遺物包含層が確認され、青磁片等が認められる。

**13．大久保遺跡**（天城大久保）

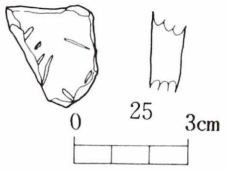
平土野港より北へ約1,000m、湾屋川の南の標高約10mの台地上にある遺跡で、広範囲に及ぶ。採集されている遺物は、押引文の施された土器片とカムイヤキ窯産と思われる陶器片、石器（石斧・すり石・凹石）等がみられる。




**第4図　大久保遺跡採集遺物**
（熊本大学報告より）

**14．平土野原遺跡**（天城平土野原）

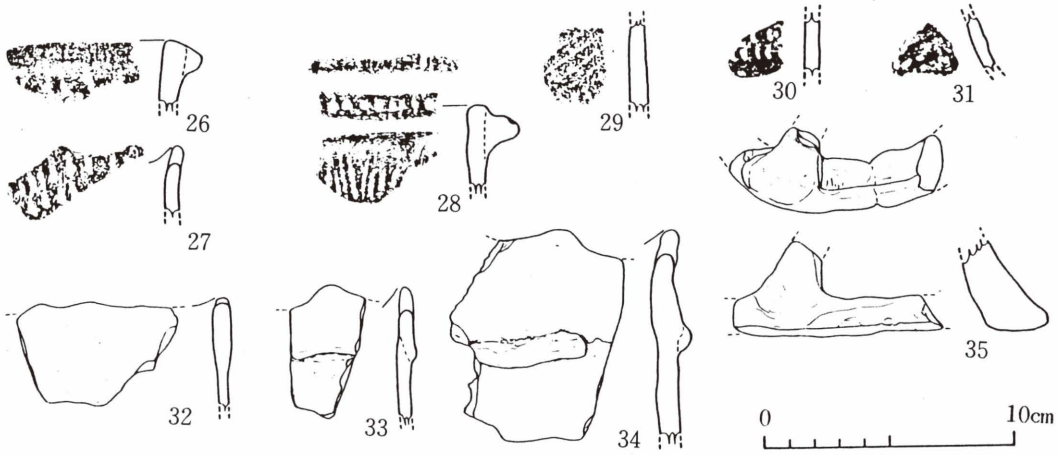
平土野港の東方で天城小学校の西側に位置する標高約30mの台地上にある遺跡で、土器の小片が採集された。25はヘラ描きの細い沈線文を施すもので縄文時代と考えられる。




**第5図　平土野原遺跡採集遺物**

**15．塔原遺跡**（兼久塔原）

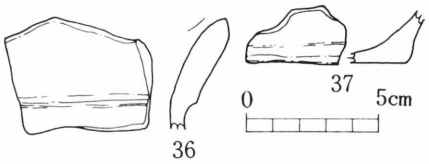
千間遺跡より約 500m 南の西海岸に面した標高約80mの台地上に位置する遺跡である。以前から知られていた遺跡で、広範囲にわたって遺物の散布が認められる。本遺跡を発見し遺物の採集を続けている地元の向井一雄氏の採集資料には黒耀石片や・黒耀石製の石鏃も含まれている。遺物については、熊本大学考古学研究室活動報告「玉城遺跡」により紹介されているので転載する。当遺跡の土器の大半は沖縄で出土するカヤウチバンタ系の土器に類似すると報告されている。また、昭和63年には熊本大学により調査が実施され、住居跡も確認されている。



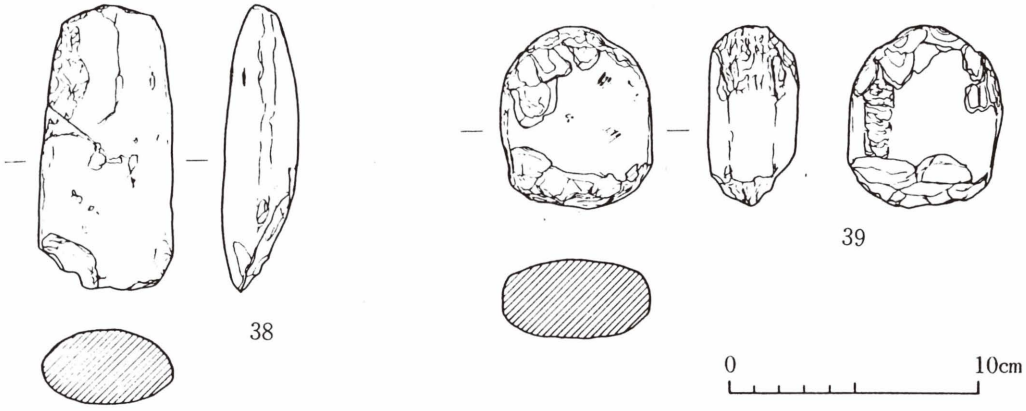

**第6図　塔原遺跡採集遺物**（熊本大学報告より）

**16．鍋窪遺跡**（兼久鍋窪）

塔原遺跡より南へ約 500m 離れた海岸沿いの急峻な崖の上に位置し、千間遺跡と谷を挟んで対峙している。遺物は石器・土器が採集されている。36は口縁部で、山形になるものと思われる。外反する口縁部でやや肥厚する。37は底部である。38は石斧、39は敲石で上下に敲打痕が顕著に認められる。



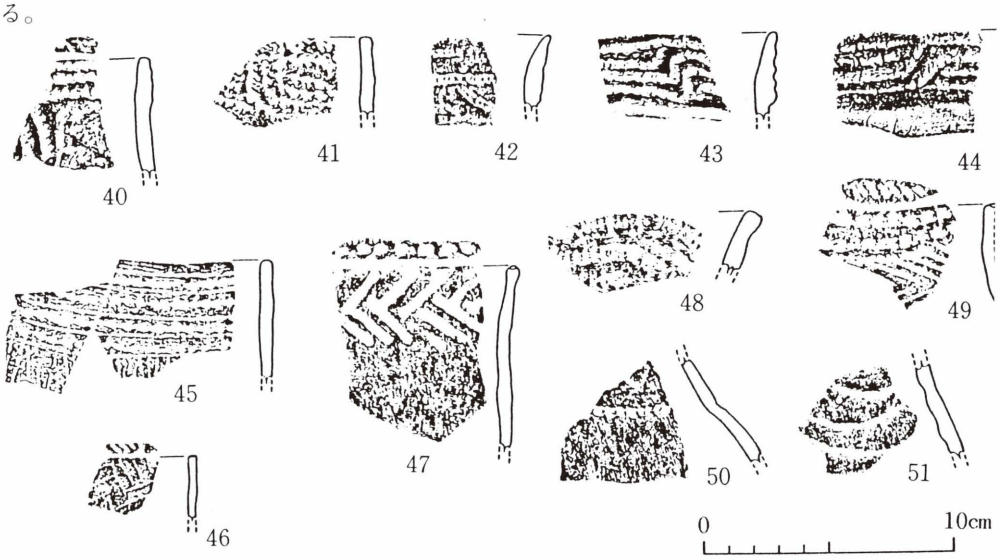

**第7図　鍋窪遺跡採集遺物**




**第8図　鍋窪遺跡採集遺物**（熊本大学報告より）

**17．千間遺跡**（大津川千間）

徳之島の西海岸に位置する千間海岸を臨む標高約70mの隆起石灰岩の台地上にある遺跡で、かなり以前から知られていた遺跡である。遺物は土器片・石器が多く採集されており、上村氏および熊本大学により紹介されている。本報告では熊本大学の了解を得て資料を転載する。遺物についての詳細な説明は報告書にあるので、ここでは簡単に紹介するにとどめるが、58・40～44は面縄東洞式に、45は嘉徳Ⅰ式に、46は嘉徳Ⅱ式に当たるとされている。また、47は南九州の縄文時代中期末～後期前半の阿高式土器との関連性も考えさせられるものと言われている。




**第９図　千間遺跡採集遺物**（熊本大学報告より）

**19．秋利神線刻岩**（瀬滝秋利神）

秋利神川の左岸の山中にあり、２畳敷位の大岩に船等が線刻されているものである。現在のところ、諸説があるが決め手になるものがなく、時期・性格等不明である。このような線刻のある岩・礫は徳之島の各所に存在するもので、なんらかの係わりがあるものと思われる。今後の研究課題である。

**21．西阿木名遺跡**（西阿木名）

阿木名小学校の北方約３km付近の川近くの山中で発見されたもので、その正確な位置は確認されていない。出土した完形の壺は須恵質であるが、カムィヤキ窯産の陶質土器ではないかと思われる。この遺物は、現在、伊仙町犬田布岬岩井博物館に保管・展示されている。

## 第2表　天城町遺跡地名表

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 地形 | 時代 | 遺物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 大城跡 | 松原大城山 | 山頂 | 歴史 | | |
| 2 | 大和城跡 | 天城上名道 | 山頂 | 歴史 | | |
| 3 | 玉城跡 | 天城真瀬名 | 丘陵 | 歴史 | 磁器カムィヤキ産陶片・土器 | 昭和59年　熊本大学調査 |
| 4 | アガリン竿 | 松原アガリン竿 | 台地 | 歴史 | 岩石製フイゴ羽口 | 正確な位置については未確定 |
| 5 | 馬塔 | 岡前馬塔 | 砂丘 | 縄文・弥生 | 土器片・石器 | |
| 6 | 尾志理田 | 川津部 | 砂丘 | | 土器片 | |
| 7 | オカゼン | 岡前 | 砂丘 | | 土器片 | |
| 8 | 戸ノ木 | 岡前戸ノ木 | 砂丘 | 弥生 | 土器片（兼久式） | |
| 9 | 塩浜 | 岡前塩浜 | 砂丘 | | 土器片 | |
| 10 | オガミヤマ | 岡前オガミヤマ | 独立丘陵 | 歴史 | 青磁・土器片 | |
| 11 | 中尾宮塔 | 岡前中尾宮塔 | 台地 | 歴史 | 磁器・陶器片 | 昭和63年　文化課調査 |
| 12 | 鬼入塔 | 浅間鬼入塔 | 台地 | 歴史 | 青磁・白磁・染付・カムィヤキ産陶質土器 | 昭和63年　文化課調査 |
| 13 | 大久保 | 天城大久保 | 台地 | 縄文・歴史 | 土器・カムィヤキ産陶質土器 | |
| 14 | 平土野原 | 平土野平土野原 | 台地 | 縄文 | 土器片 | |
| 15 | 塔原 | 兼久塔原 | 台地 | 縄文 | 土器・石器 | 昭和63年　熊本大学調査 |
| 16 | 鍋窪 | 兼久鍋窪 | 台地 | 縄文 | 土器・石器 | |
| 17 | 千間 | 大津川千間 | 台地 | 縄文 | 土器・石鏃 | |
| 18 | 長竿 | 瀬滝長竿 | 台地 | 歴史 | 磁器・凹石 | 昭和63年　文化課調査 |
| 19 | 秋利神線刻岩 | 瀬滝秋利神 | 台地 | | | |
| 20 | 西阿木名線刻礫 | 西阿木名 | 丘陵 | | | |
| 21 | 西阿木名 | 西阿木名 | | 歴史 | 完形壺 | 犬田布岬岩井博物館蔵 |

## 参考文献


1．熊本大学文学部考古学研究室「玉城遺跡」研究室活動報告19　1985

2．上村俊雄　「徳之島の先史時代」南日本文化第17号　1984

3．鹿児島県教育委員会　「鹿児島県市町村別遺跡地名表」鹿児島県埋蔵文化財調査報告(36)　1985

4．鹿児島県教育委員会　「鹿児島県の中世城館跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告(43)　1987

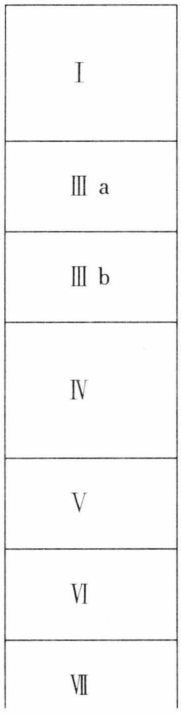
5．「伊仙町誌」　伊仙町誌編さん委員会　1978

6．「天城町誌」　天城町役場　1978

# 第Ⅲ章　層　　位

**鬼入塔遺跡**

遺跡内の地層は天地返しが行われていて、基本層が削平されていたりした。その為、場所によって層厚や層序に若干の相違はあるが、基本的にはⅠ層耕作土からⅦ層基盤岩まで第10図のように7層に区分できる。




**第10図　模式柱状図**

Ⅰ　層　やや灰色を帯びた褐色～茶褐色の耕作土で、20～70cmの厚さで堆積している。下部に地元で「ケーキ」と呼ぶ砂糖きびの絞りカスが堆積している部分があり、天地返しが行われたことがわかる。

Ⅱ　層　本遺跡では削平されていたが、他の地域では暗褐色土で遺物包含層が確認されている。

Ⅲ a 層　黄灰色硬質土。乾燥すると縦に強いクラックがはいる極めて粘質の強い層である。20～30cmの厚さで堆積している。

Ⅲ b 層　暗茶褐色粘質土。Ⅲ層の黄灰色硬質土に黒粒子が含まれる層で、やはり乾燥すると縦に強いクラックがはいる極めて粘質の強い層である。4・6・9トレンチで確認されている。

Ⅳ　層　赤褐色粘質土。濃い赤褐色を呈し風化が著しく粘質が強い。透水性が極めて低い。本層は奄美地方で「マージ」と称されている粘質土に相当する。

Ⅴ　層　青灰色粘質土。下部の安山岩腐植土が混入したもので、1トレンチのみで確認された。やはり風化が著しく粘質が強い。

Ⅵ　層　赤褐色礫混じり粘質土。下部の安山岩腐食土が混入したもので、風化が著しく粘質が強い。

Ⅶ　層　基盤岩。風化した安山岩からなる。

**長竿遺跡**

遺跡内の地層は天地返しが行われていて、旧地形はほとんど削平されていた。天地返しは琉球石灰岩の直上まで行われており、石灰岩と石灰岩の間に旧地形が若干残っているにすぎなかった。

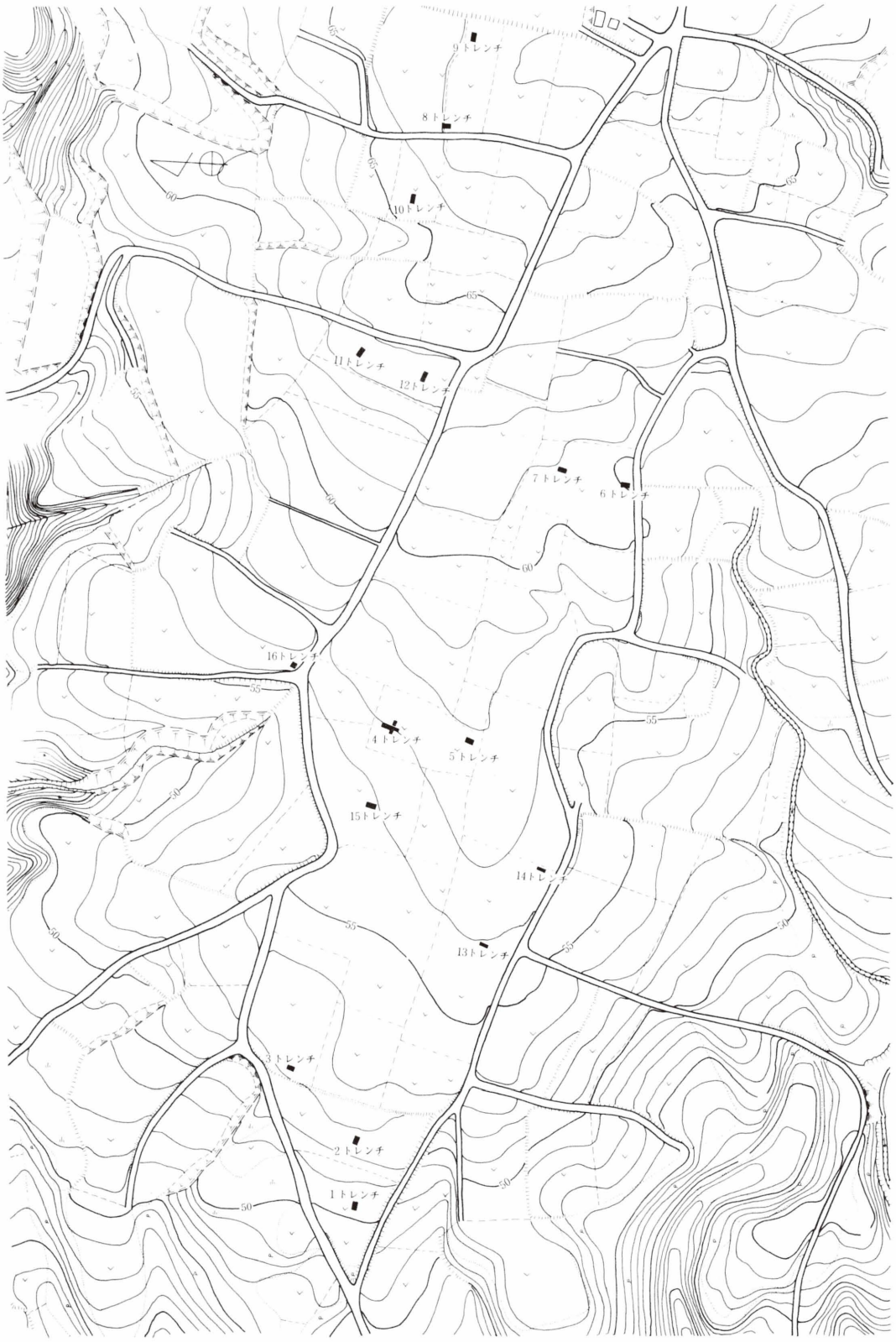
Ⅰ層　耕作土。昨年夏、天地返しを行い攪乱されている。

Ⅱ層　旧耕作土で、黒褐色有機質土である。

Ⅲ層　暗褐色粘質土。乾燥すると縦に強いクラックがはいる極めて粘質の強い層である。

Ⅳ層　基盤岩。琉球石灰岩からなる。

琉球石灰岩の基盤は、北から南へ傾斜していて、その上部に天地返しの盛り土がなされている。本来は、遺物は第Ⅲ層に包含されていたものと思われる。




第11図　鬼入塔遺跡周辺地形図及びトレンチ配置図

# 第Ⅳ章　鬼入塔遺跡の調査

## 第１節　調査の概要

鬼入塔遺跡は昭和61年の分布調査でカムィヤキ窯で生産されたと思われる陶質土器（類須恵器とも呼ばれる）の破片と青磁片等の採集により発見された遺跡である。調査対象面積が約9haであるが、大半がさとうきび畑で確認トレンチを思いどおりに設定することができなかった。それでも作付け以前の畑地・芋畑等をさがしてトレンチを設定した。また、長竿遺跡の調査をはさんで、後半はトレンチの入っていない地域においては、さとうきび畑の中も調査対象とした。トレンチは２×４ｍを基本としたが、畑地の状態で２×２ｍ・１×４ｍ等のトレンチも設定し、全部で16箇所、132㎡の調査を行った。

調査の結果、ほとんどの畑地において天地返し（さとうきびのために数年に１回バックホーなどの重機により畑地を約１ｍ掘り起こす）を受けているため、遺物包含層であるⅡ層は攪乱されている。そのため、遺物は表層・攪乱層より若干出土はするもののノーマルな状態での出土ではない。遺物は61年の分布調査の時に採集された遺物と同様の、カムィヤキ窯産の陶質土器・青磁・白磁・染付等が出土している。

## 第２節　遺　構（第12図）

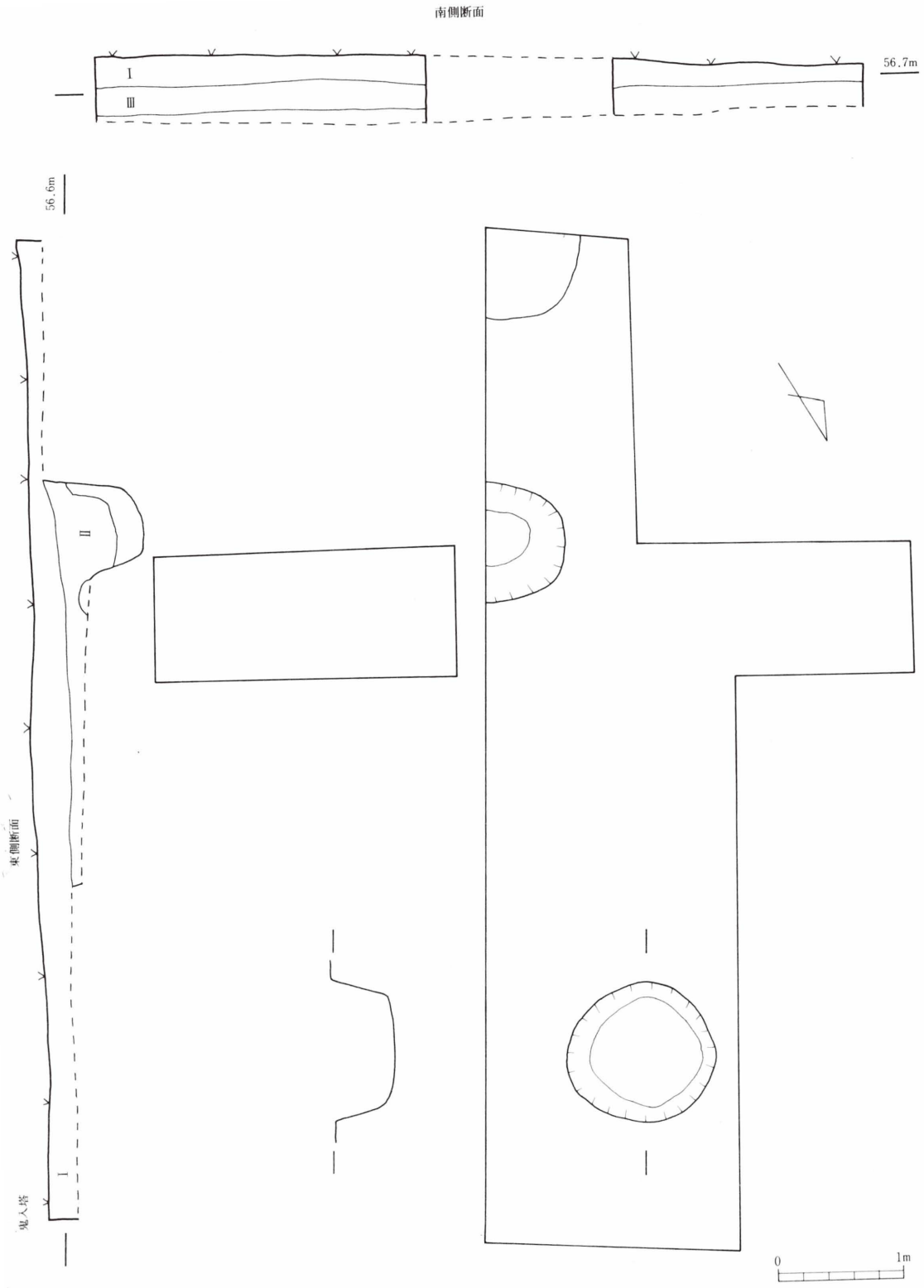
遺構について見ると、ほとんどの畑地で天地返しが行われているため、遺物包含層および遺構検出面は攪乱されており確認できなかった。ただ、第４トレンチを設定した畑地は天地返しがなされていないためⅢ層上面が残っており、Ⅲ層上面で落ち込みが３箇所検出された、そのうち２基について調査を行った。

ピット１は径１ｍ×0.9ｍ、深さ0.5ｍを測る摺鉢状を呈している。検出面はⅢ層で、埋土はⅡ層土である。遺物の出土は認められない。

ピット２は東壁寄りに検出され全体形状はつかめていない。径は南北方向で 0.9ｍで深さ約0.3ｍを測る。ピット１と同様摺鉢状を呈し、埋土はⅡ層土で、遺物の出土は認められない。

ピット３は東壁・南壁よりに約４分の１が検出されたが、ピットの掘下げは行わなかった。径は約１ｍと思われる。

第４トレンチで検出されたピットは、３基とも径約１ｍと同じような大きさで、関連性が考えられるが遺物が伴わず、性格・時期等は判明しない。




第12図　第４トレンチ平面図・断面図

## 第３節　各トレンチの調査

**第１トレンチ**（第14図）

第１トレンチは、遺跡の一番西側にある標高約50～52mの畑地に２箇所設定したうちの１箇所である。トレンチは東西方向に長く２×４ｍで設定した。

この畑地は、以前に耕作者による地下げが行われており、Ⅰ層（耕作土）の下はすぐにⅢ層の黄灰色硬質土・赤橙色粘質土であり、遺物包含層は認められなかった。

**第２トレンチ**（第14図）

第２トレンチは、第１トレンチと同じ畑地内に設定したもので、第1トレンチより東へ約30mの位置である。トレンチは東西方向に長く２×４ｍで設定した。

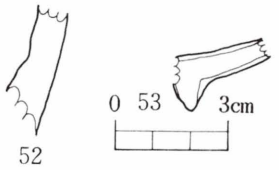
第１トレンチと同様でⅠ層の下は黄灰色硬質土・赤橙色（礫を含む）で、遺物包含層は認められなかった。

**第３トレンチ**（第14図）

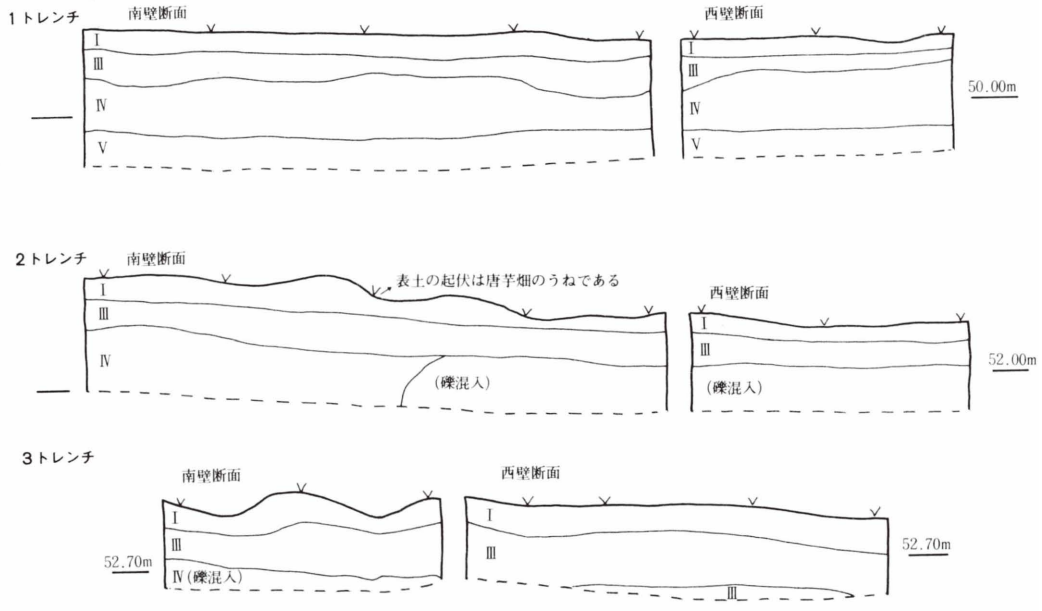
第３トレンチは、第２トレンチの北東約50mの畑地（標高約53m）に南北方向に長く２×３ｍで設定した。

Ⅰ層は耕作土と暗黄褐色土に細分され、その下は黄橙色及び赤橙色土になる。遺物はⅠ層中より２片だけ出土する。

52は白磁で、碗の底部と思われる。外面の下位は露胎である。53は青磁で、碗の底部である。釉が内外面にかかるが、畳付きは露胎である。




**第13図　３トレンチ出土遺物**



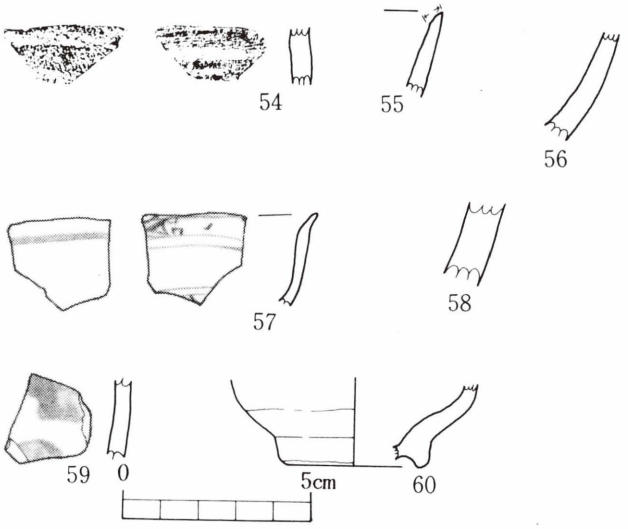

**第14図　第１・２・３トレンチ断面図**

**第4トレンチ**（第12図）

第4トレンチは、第3トレンチより東へ約170mの位置で標高約57mの畑地に2箇所設定したうちの1箇所である。南北方向に長い、2×4mのトレンチを設定した。

このトレンチを設定した畑地では天地返しがされていないため、Ⅲ層上面でピットが検出された。また、一部に溝状の落ち込みと思われるラインが確認されたため、拡張して調査を行ったが、ピット以外には遺構は認められなかった。ピットについては第2節（遺構）で詳述してあるので、ここでは略する。

遺物はⅠ層中よりわずかに出土している。54はカムィヤキ産と思われる陶質土器である。内外面共ナデ整形で、色調は青灰色を呈する。55は白磁の碗で、口ハゲ口縁である。56は青磁の碗。57は染付の碗である。外面に1条の界線、口縁部内面には3条の界線と界線間に袈裟襷文が描かれ、見込みにも界線等が認められる。58は褐色の釉がかかるものである。59はひび焼き染付。60は小壺である。



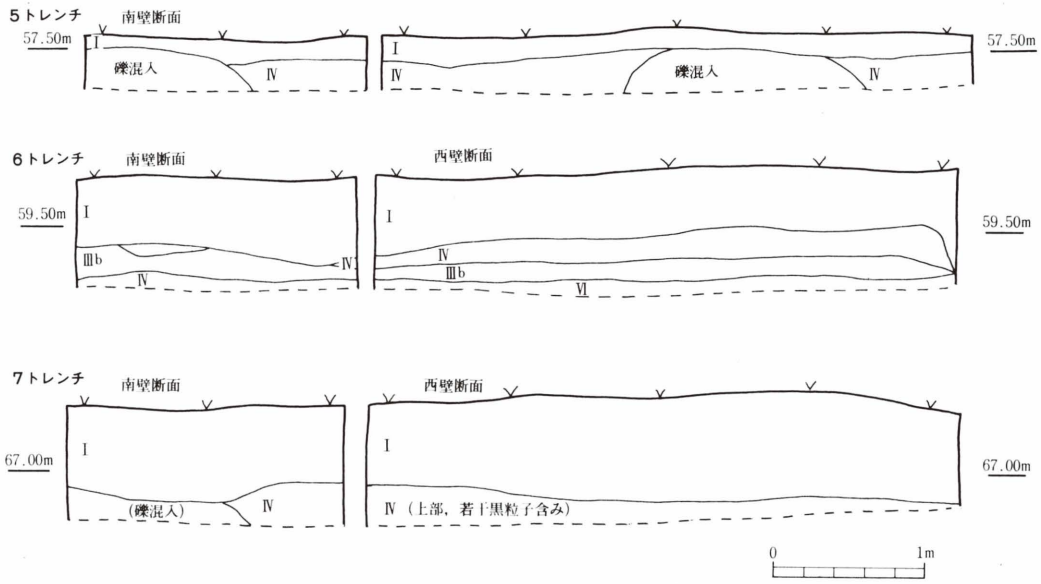

**第15図　第4トレンチ出土遺物実測図**

**第5トレンチ**（第16図）

第5トレンチは、第4トレンチと同じ畑地内で約40m南側の位置に、南北に長く2×4mのトレンチを設定した。この畑地は天地返しはされていないが、畑地を作る際に地下げが行われたものらしく、Ⅰ層の下はⅢ層（赤橙色・礫層）で遺物包含層は認められず、遺物も出土しなかった。

**第6トレンチ・第7トレンチ**（第16図）

第6トレンチ・第7トレンチは、第5トレンチより東へ約140mの位置にある畑地（標高約60m）に30mの間隔をおいて設定した。いずれも南北に長い2×4mのトレンチである。この畑地も天地返しがされているため両トレンチとも地表下50～70cmが攪乱を受け、遺物包含層は認められなかった。また、遺物も出土しなかった。



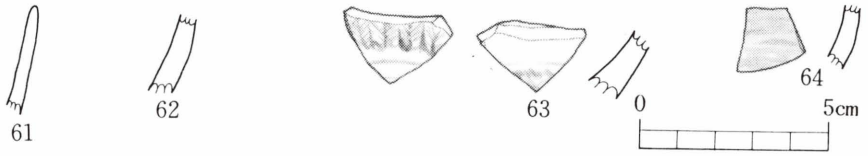

**第16図　第５・６・７トレンチ断面図**

**第８トレンチ・第９トレンチ**（第18図）

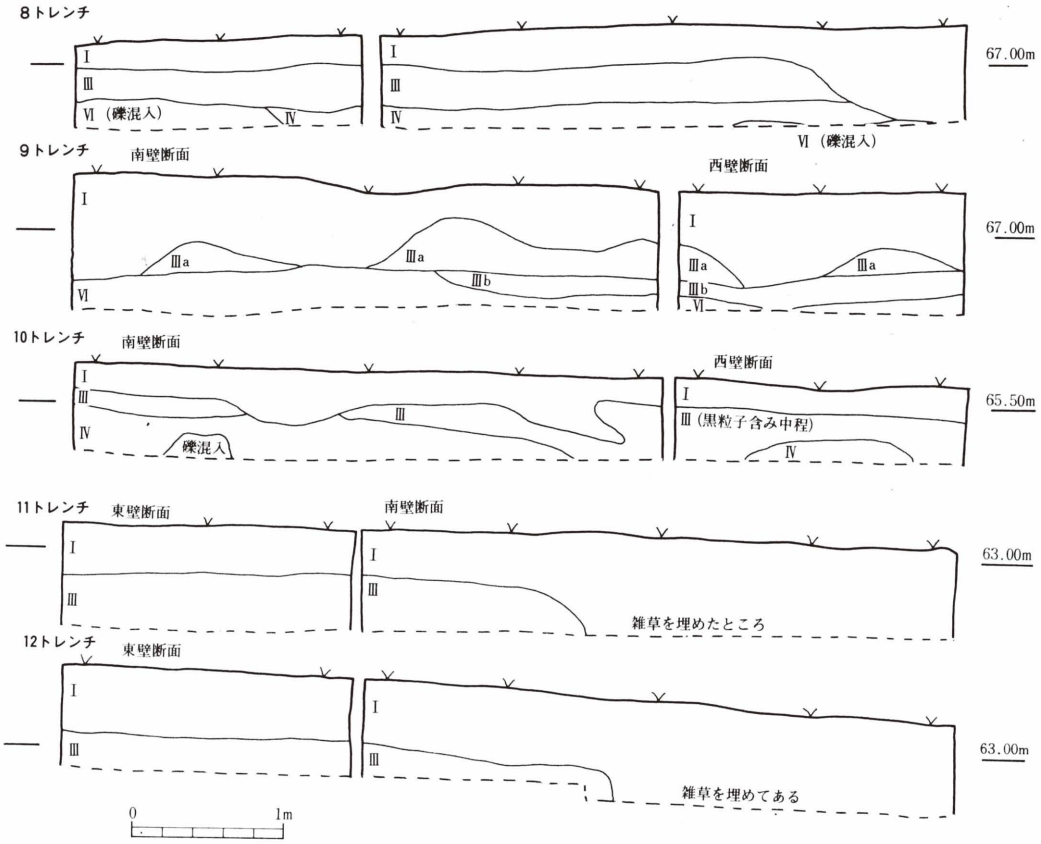
第８トレンチ・第９トレンチは、遺跡の東端に位置する標高約67mの畑地に設定した。第８トレンチは、南北に長く２×４ｍ、第９トレンチは東西に長く２×４ｍとした。この畑地においても天地返しがされているため遺物包含層は認められなかった。遺物は９トレンチⅠ層より３点出土している。61は白磁の碗で口縁部の端部がわずかに露胎で口ハゲ状を呈する。63は染付の碗。外面には芭蕉文、内面には花文が描かれる。64も染付と思われる。

**第10トレンチ**（第18図）

第10トレンチは、第８トレンチの西側約40mに位置する標高約65mの畑地に設定した。この畑地は上部の層が削平されているため、遺物包含層は認められない。遺物はⅠ層より１点だけ出土している。62は器面の風化が著しいため、磁器か陶器か区別がつけにくいものであるが、青磁の碗と思われる。




**第17図　第９・10トレンチ出土遺物実測図**




**第18図　第８・９・10・11・12トレンチ断面図**

**第11トレンチ・第12トレンチ**（第18図）

第11トレンチ・第12トレンチは、第10トレンチより西へ約80m に位置する標高約63m の畑地に設定した。いずれも東西に長い２×４ｍのトレンチである。この畑地も、最近天地返しが行われたということで、地表下約70cmの深さまで攪乱を受けていた。

**第13トレンチ・第14トレンチ**（第19図）

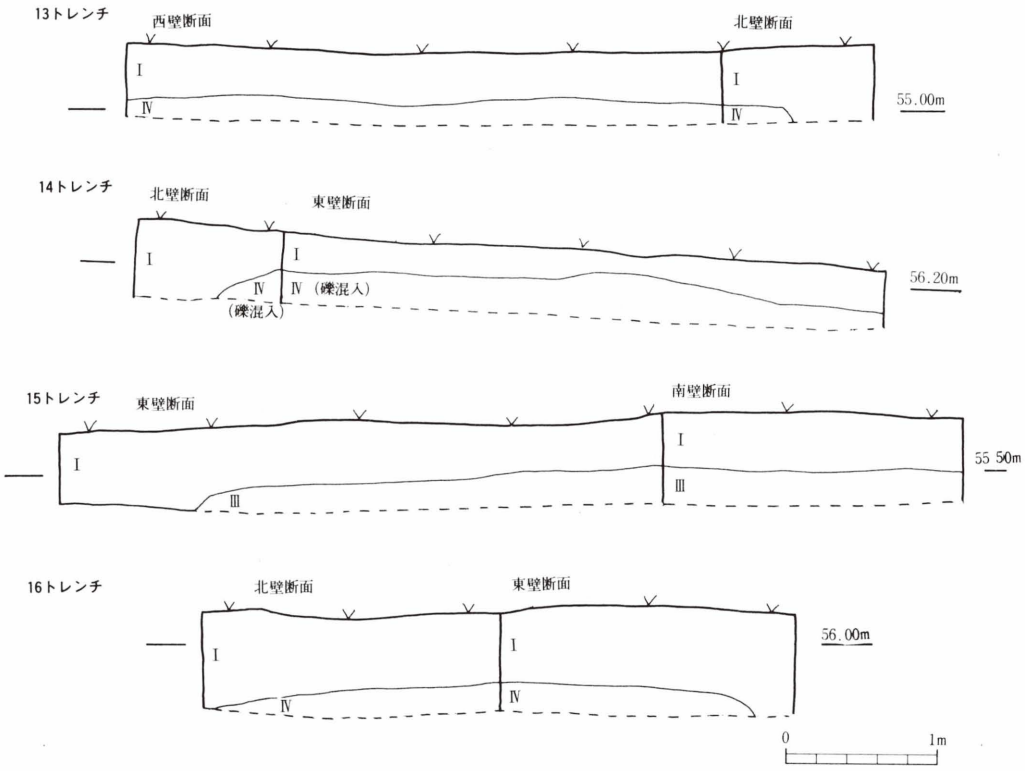
第13トレンチ・第14トレンチは、第１トレンチより約 120m 東に位置する標高約56m の畑地に設定した。さとうきびを刈って調査を行うため、南北に長い１×４ｍの狭いトレンチとしたこの畑地は上部の層が削平されているため、遺物包含層及び遺物は認められなかった。

**第15トレンチ**（第19図）

第15トレンチは、第４トレンチより約40m西側に位置する標高約56mの畑地に、南北に長く２×４ｍで設定した。この畑地も天地返しのため攪乱を受け、遺物包含層及び遺物は認められなかった。

**第16トレンチ**（第19図）

第16トレンチは、第４トレンチより約60m北側に位置する標高約56mの畑地に２×２ｍで設定した。この畑地も天地返しのため攪乱を受け、遺物包含層及び遺物は認められなかった。

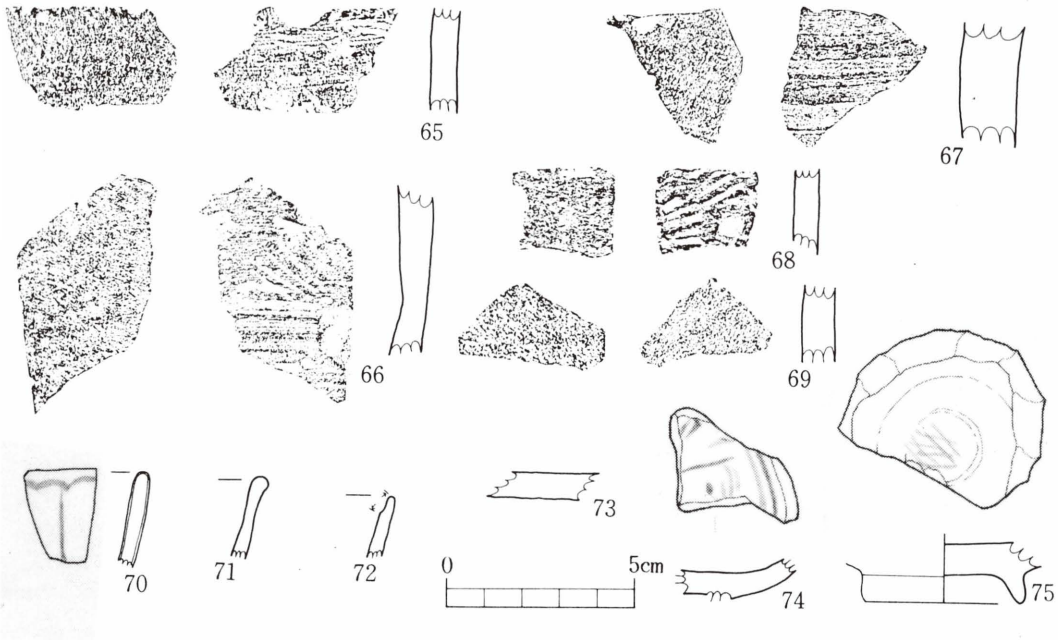



**第19図　第13・14・15・16トレンチ断面図**

**表面採集遺物**（第20図）

65～75は遺跡地内で表面採集された遺物である。65～69はカムィヤキ窯産と思われる陶質土器である。65は甕の胴部で、内外面ともに平行タタキのあとでナデ整形が施されている。66・68は甕の胴部で、外面はタタキの後ナデ整形。内面は扇状を呈する平行タタキの後ナデ整形を施す。67は厚手の甕である。内外面ともにナデ整形が施される。69は内外面ともに丁寧なナデ整形が施されている甕である。70・71は青磁で碗の口縁部である。70は蓮弁が見られる。71は

端反り気味の口縁である。72・73は白磁の碗。72は口ハゲ口縁である。73は底部で外面は露胎である。74・75は染付の碗。74は見込みに花文らしい文様が描かれる。75は見込みに格子状の文様が描かれる。




**第20図　表面採集遺物実測図**

## 第4節　小　結

鬼入塔遺跡は、徳之島空港の東方約1,200m に位置し、標高 211m の馬鞍岳からのびてくる標高50～70m のゆるやかな傾斜の台地上にある。

昭和61年の分布調査においては中世の遺物（青磁・カムィヤキ産と思われる陶質土器）が採集されている。今回の調査においては、遺跡地内のほとんどの畑地が天地返し、削平を受けているため遺物包含層は認められなかった。また、遺物もⅠ層中よりわずかに出土しただけであった。出土遺物・表面採集遺物ともにカムィヤキ窯産と思われる陶質土器・青磁・白磁・染付で、中世から近世にかけての遺跡であったものと思われる。

鬼入塔遺跡の地名についてみると、「オニ」は、強い人・武将、「イリ」は、男子の兄弟、「トウ」は、所・場所という意味を持つということである。(註1) つまり、強い武将の兄弟が住んでいる所ということになる。遺跡の北東約1,000m の大城山（標高 331m ）はアジ（按司：村長的存在）の居城であったと言われている。地名によって考証をすることは早計ではあると思われるが、鬼入塔遺跡の位置づけを大城との関連性で考えることも必要ではないだろうか。

註1　義憲和氏の教示による。

# 第Ⅴ章　長竿遺跡の調査

## 第１節　調査の概要

長竿遺跡は昭和63年２月鹿児島県教育庁文化課による奄美地区埋蔵文化財分布調査で発見された遺跡であり、当初はフネントウー遺跡と呼称したところである。その時は、カムイヤキ窯で生産されたと思われる陶質土器の破片と凹石（第21図）が表採されている。

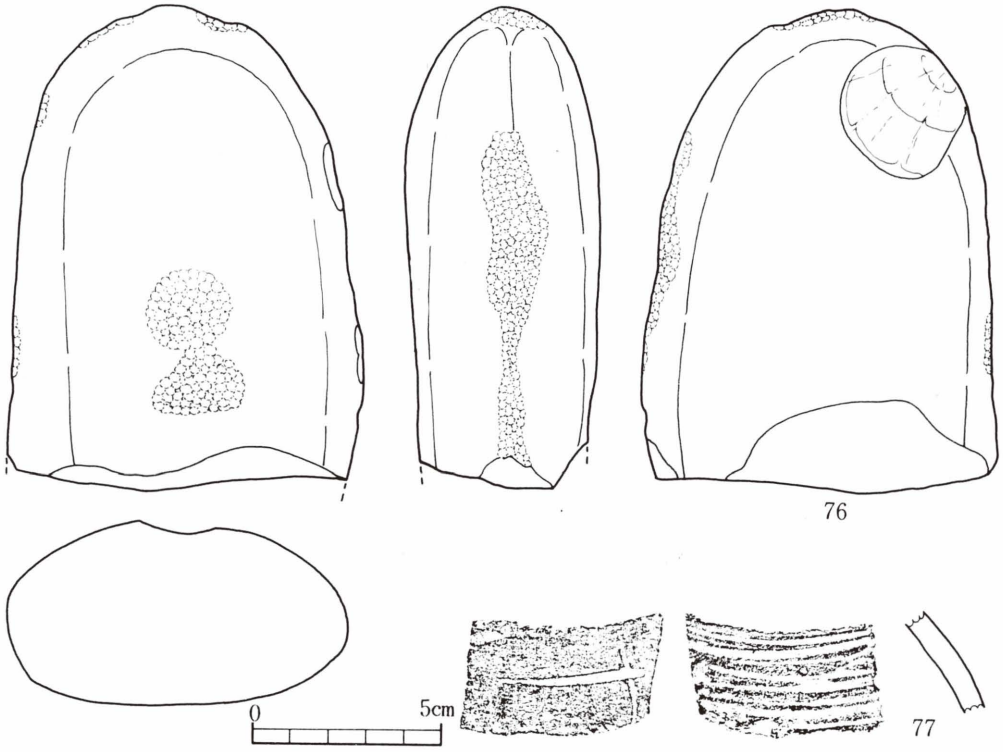
当地区は昭和63年度中に県営畑地帯総合土地改良が計画されていたことから、事業着工前に遺跡の性格等を把握するため確認調査を実施した。

調査対象面積は約1,000㎡である。分布調査で遺物が採集された北向きの傾斜面に８ｍ×２ｍのトレンチを２箇所と10ｍ×２ｍのトレンチ１箇所を設定し掘り下げた。調査面積は52㎡である。

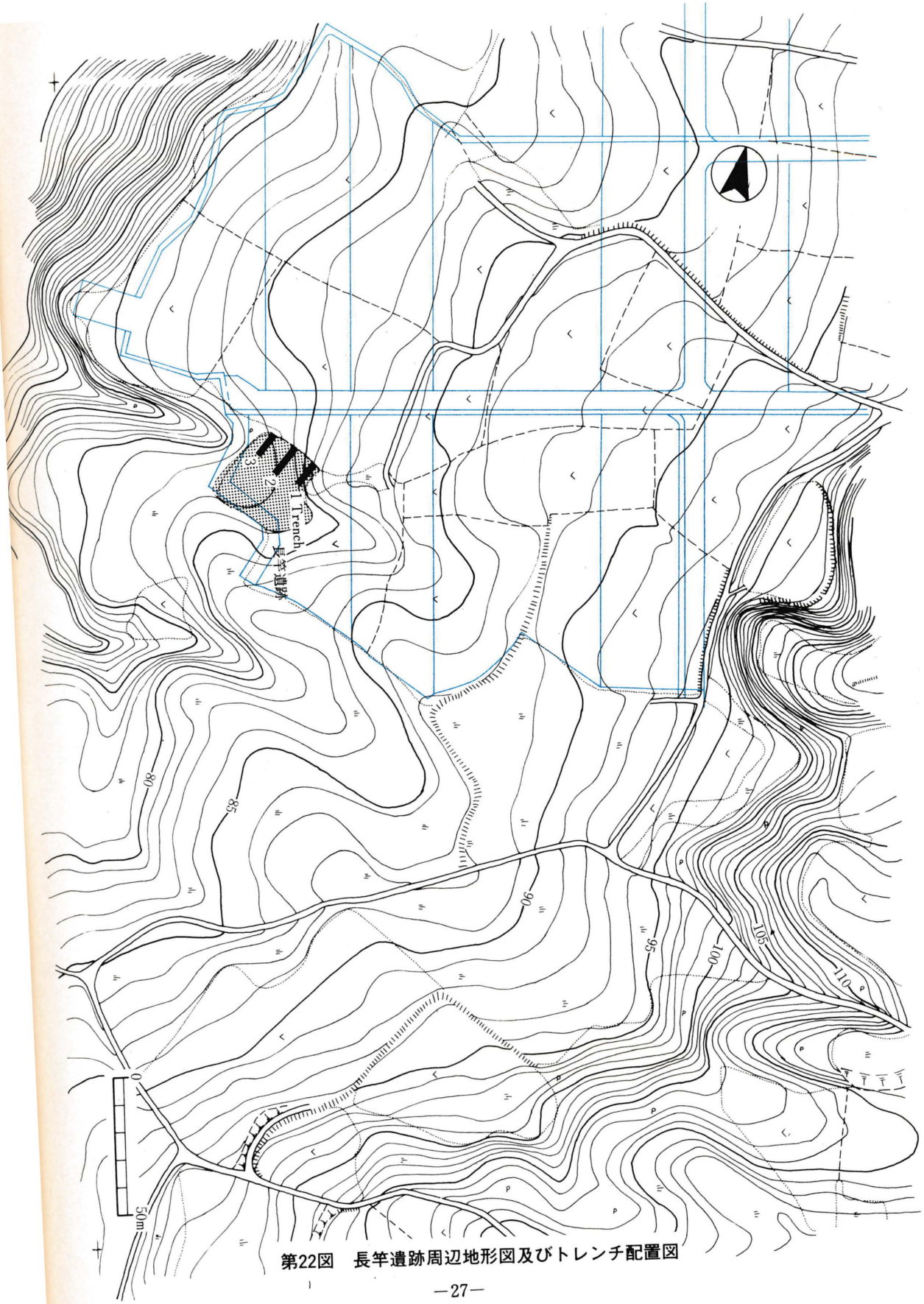
調査の結果、昨年の夏に天地返し（さとうきびの成育の為に数年に１回畑地を約１ｍ掘り起こし土の入れ替えを行う）を受け、遺物包含層は削平されている為、遺構・遺物とも出土しなかった。遺物は表層より出土したものや周辺で採集したものを図化した。遺物は、カムィヤキ窯産の陶質土器・染付・陶器・古銭である。

## 第２節　遺　構

天地返しをうけ、遺物包含層及び遺構は検出されなかった。




第21図　昭和62年度採集遺物




第22図　長竿遺跡周辺地形図及びトレンチ配置図

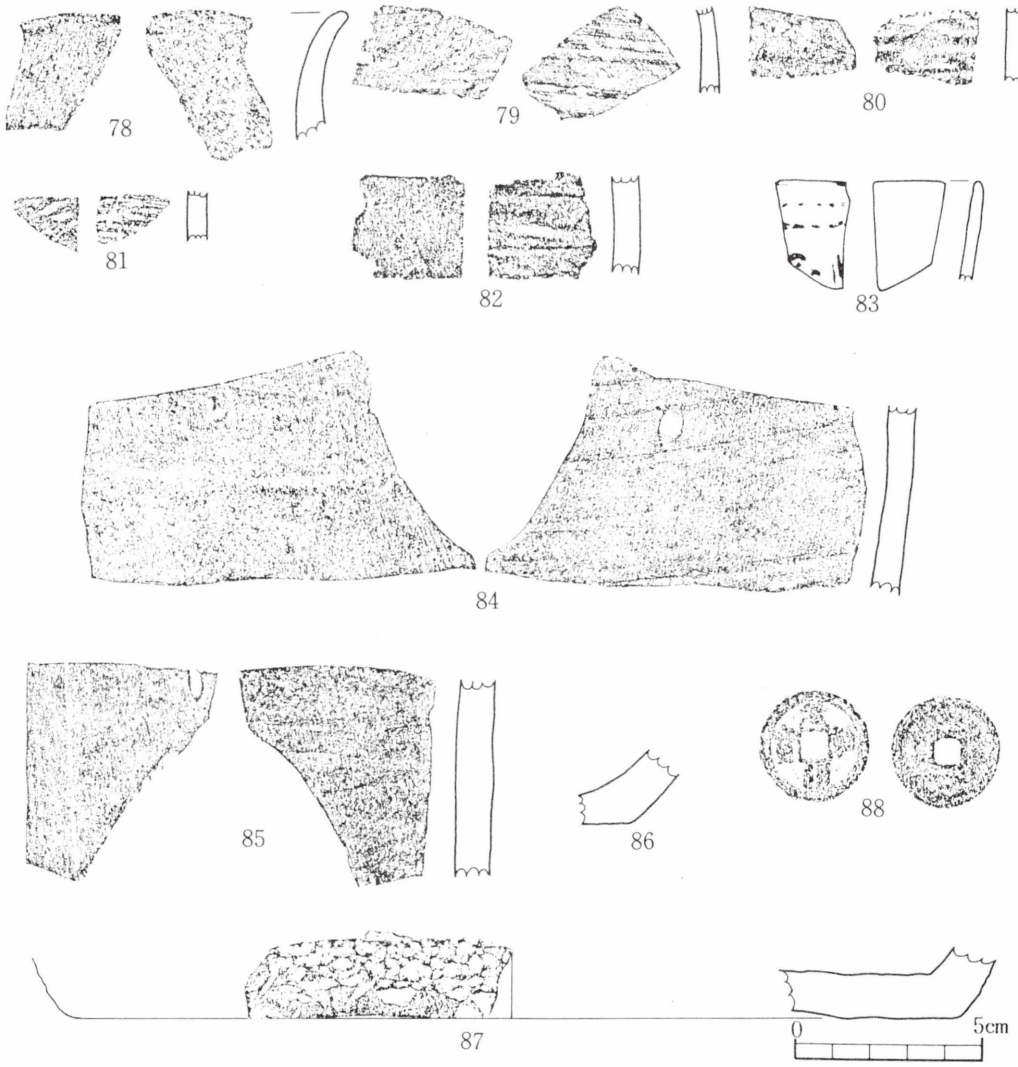
第23図　長竿遺跡土層断面図

## 第3節　各トレンチの調査

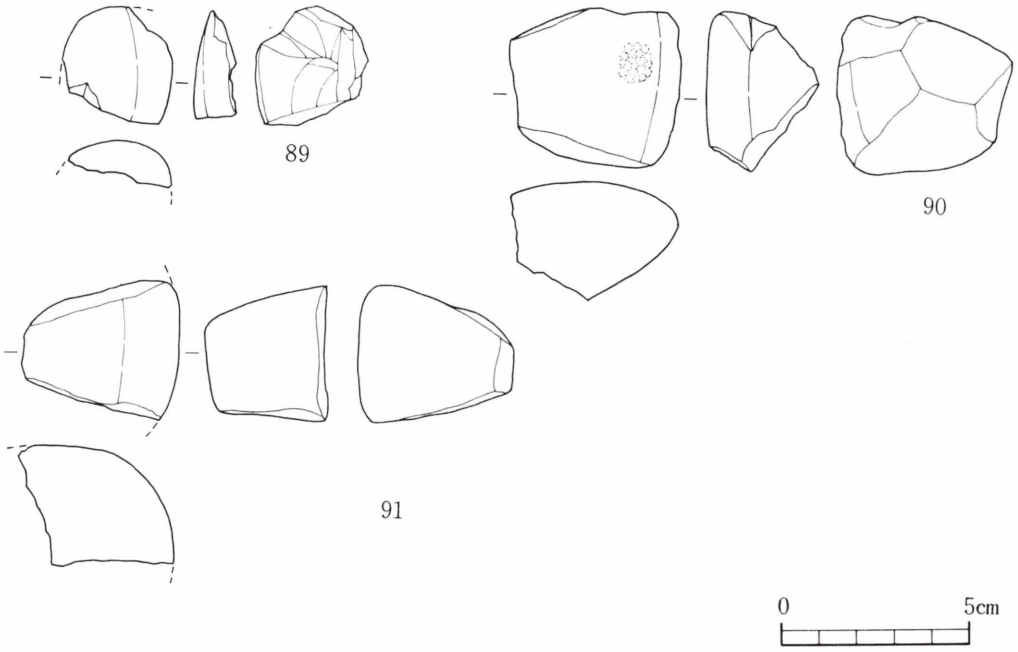
遺跡の東側から第22図の様なトレンチを設定し掘り下げを行った。遺物の出土は全て第Ⅰ層からの出土で包含層は削平されていた。Ⅳ層の琉球石灰岩の基盤岩に直接表層がのり、石灰岩と石灰岩の間に旧耕作土の黒褐色有機質土やⅢ層の暗褐色粘質土が若干残存していた。

## 第4節　遺　物

1・2は昭和63年2月の分布調査の際、採集された遺物で、1は花崗岩製の凹石である。やや扁平な長楕円形の自然礫を使用し、敲き・押し潰し・磨るといった多機能をもつものである。片面のほぼ中央に連続した敲打による潰れ痕があり若干の凹みを形成している。また、側縁部にも敲打による潰れ痕がみられる。2はカムイヤキ窯産と思われる陶質土器で外面にはヘラ記




第24図　遺物(1)




**第25図　遺物(2)**

号状の沈線がみられる。外反する口縁部で、色調は茶褐色を呈し、胎土には石英・長石・金雲母を含んでいる。内外面ともナデ整形で調整を施している。表採資料である。4～7はカムィヤキ窯産と考えられる陶質土器である。外面は格子目タタキとナデ整形を施したものがあり、内面は平行タタキである。色調は青灰色で胎土に石英・石灰粒を含んでいる。8は染付の碗口縁である。外面に2条の界線、口縁部内面には1条の界線が描かれている。9～12は陶器片である。内外面ともハケ目調整を施している。11・12はややあげ底気味の底部で平底である。13は古銭であり「元祐通宝」と読める。外径2.8cm、厚さ0.18cmを測り、無背である。遺跡内の表面採集でみつかったものである。14～16は磨石である。14は珪岩で、15・16は砂岩を使用している。研磨痕と敲打痕がみられることから多機能の用途が考えられる。

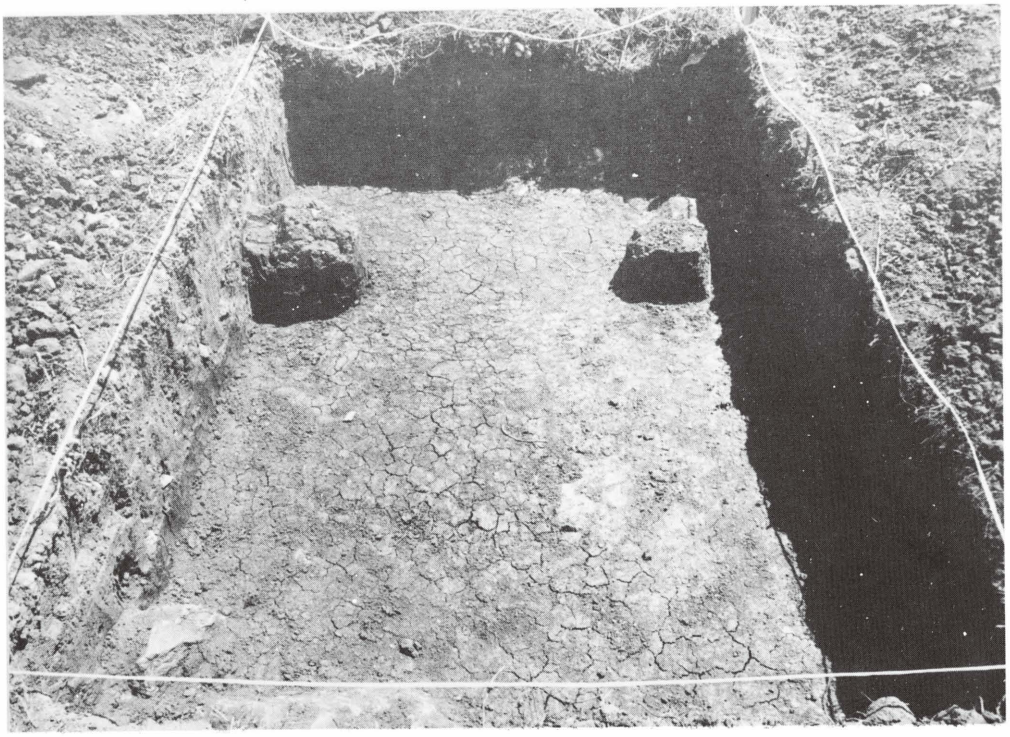
## 第5節　小　結

長竿遺跡は、3箇所のトレンチを設定して確認調査を行った結果、昭和62年夏の天地返しにより包含層が削平されていて遺跡は壊滅の状態であった。もともと、徳之島は火山灰等の影響や堆積物が少なく、基盤岩が琉球石灰岩であることから、流失が多く肥沃な土地が少ない。そこで、天地返しを繰り返し土壌改良を行っている。その為、多くの遺跡が発見される前に破壊される恐れが多分にある。最近、徳之島では国や県による畑地改良が進み、農業の見直しが成されているところであるが、遺跡の保護と開発がうまく絡みあって貰いたいと思う。

なお長竿遺跡は壊滅していたので、工事を施工し、立派な畑地に生まれかわっていった。

# 図　　版

① 鬼入塔遺跡遠景



② 第 2 トレンチ

図版2

① 第4トレンチ近景

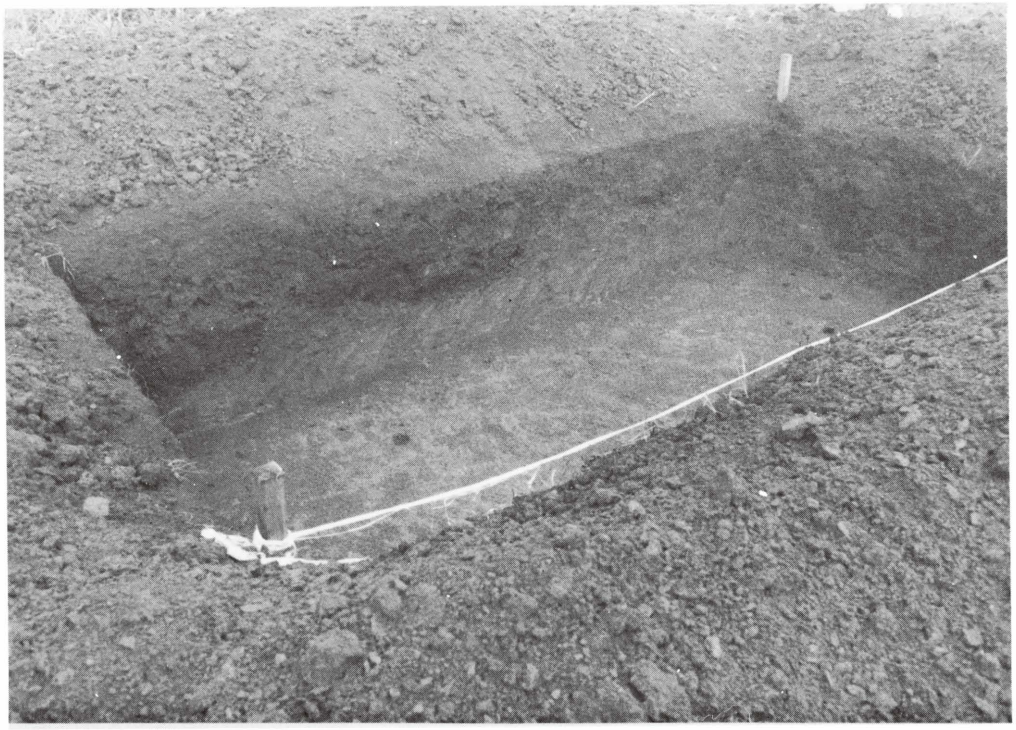
② 第4トレンチ調査風景

① 第4トレンチ（南から）

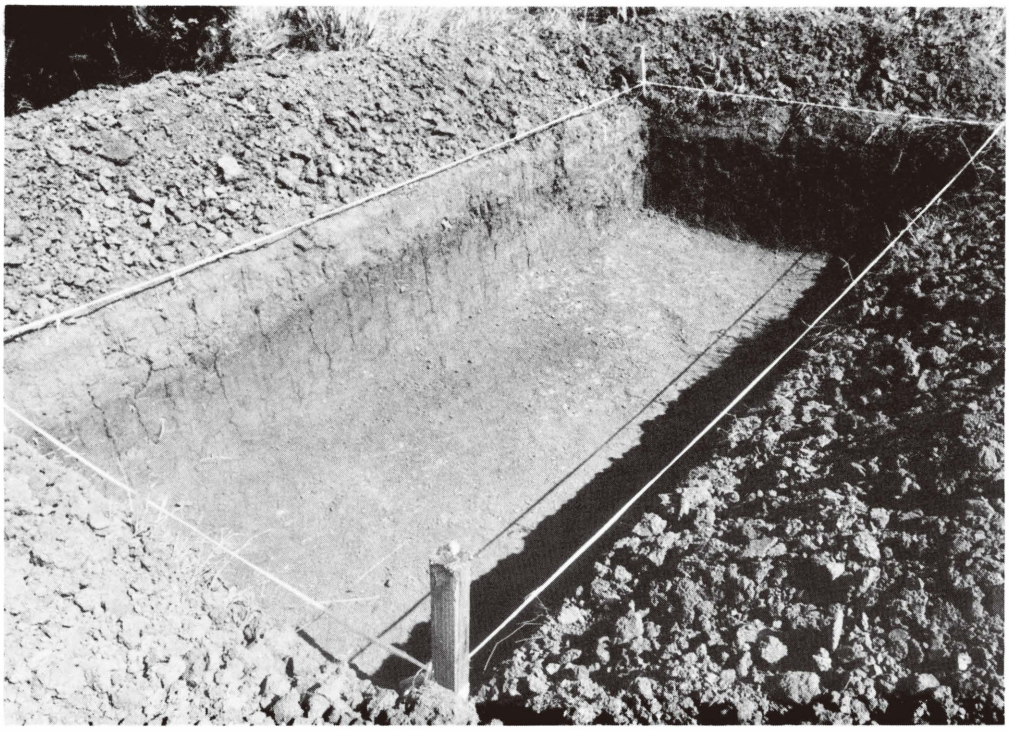
② 第4トレンチ（北から）

図版4

① 第5トレンチ



② 第6トレンチ



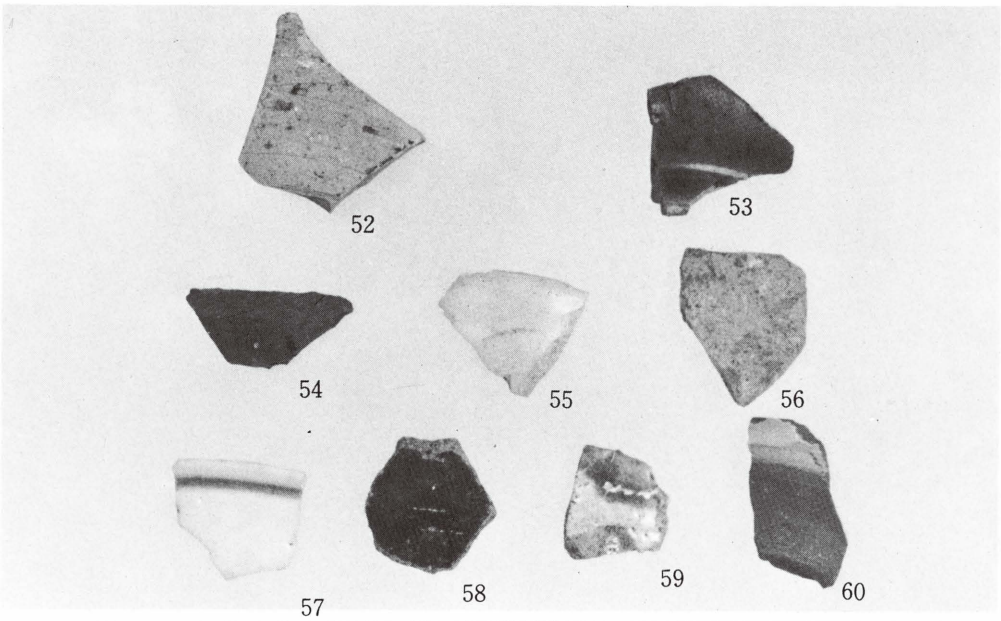
① 第8トレンチ

② 第10トレンチ

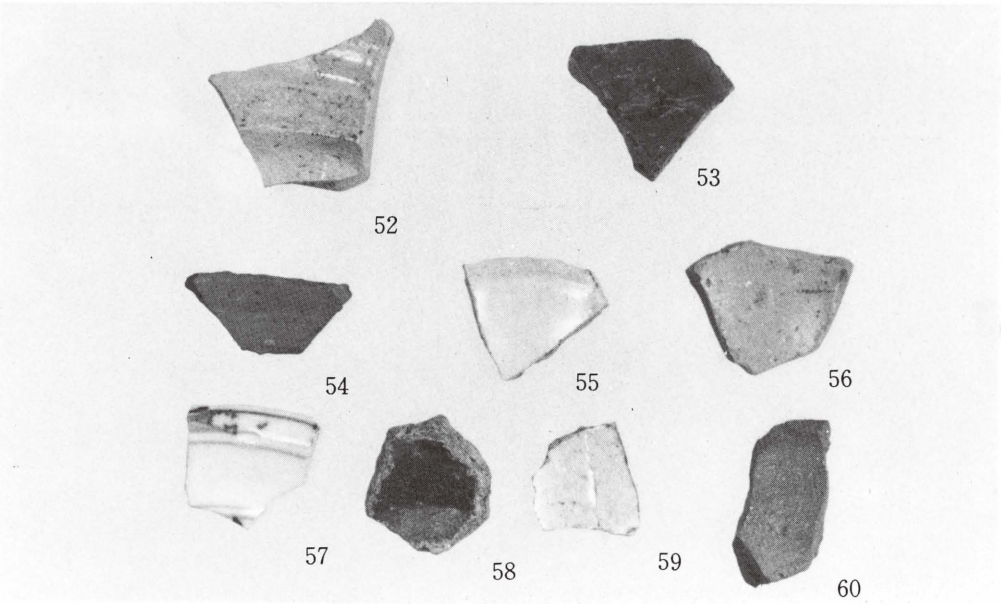
図版6

① 第11トレンチ

② 第13トレンチ

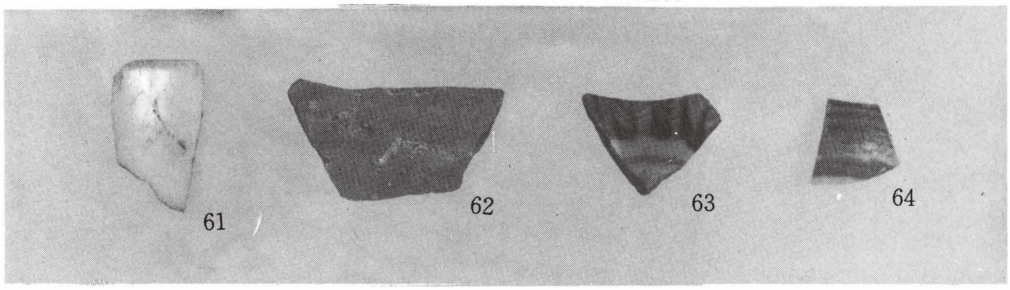



(表)



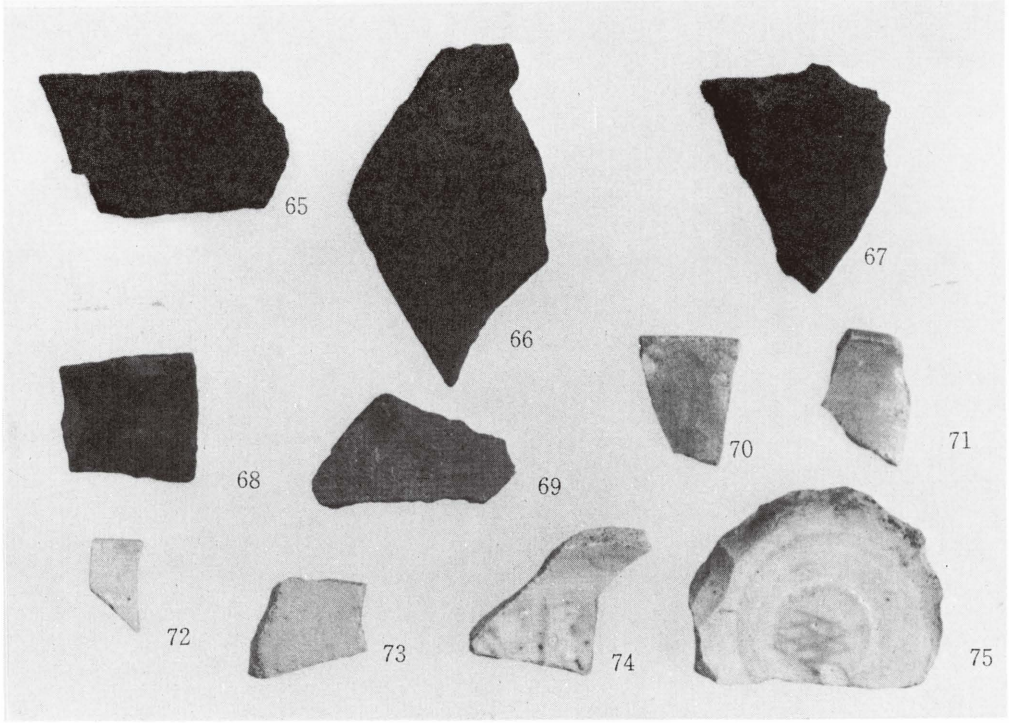

(裏)

① 第2・4トレンチ出土遺物

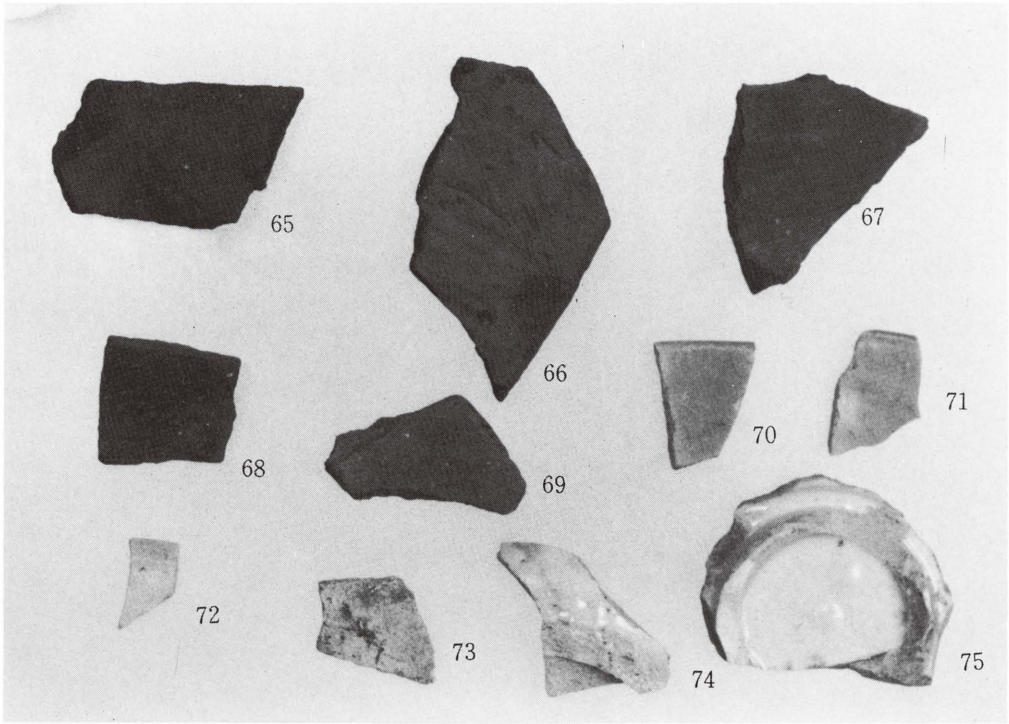



② 第9・10トレンチ出土遺物

図版8




(表)




(裏)

鬼入塔遺跡採集遺物

① 長竿遺跡近景(南から)

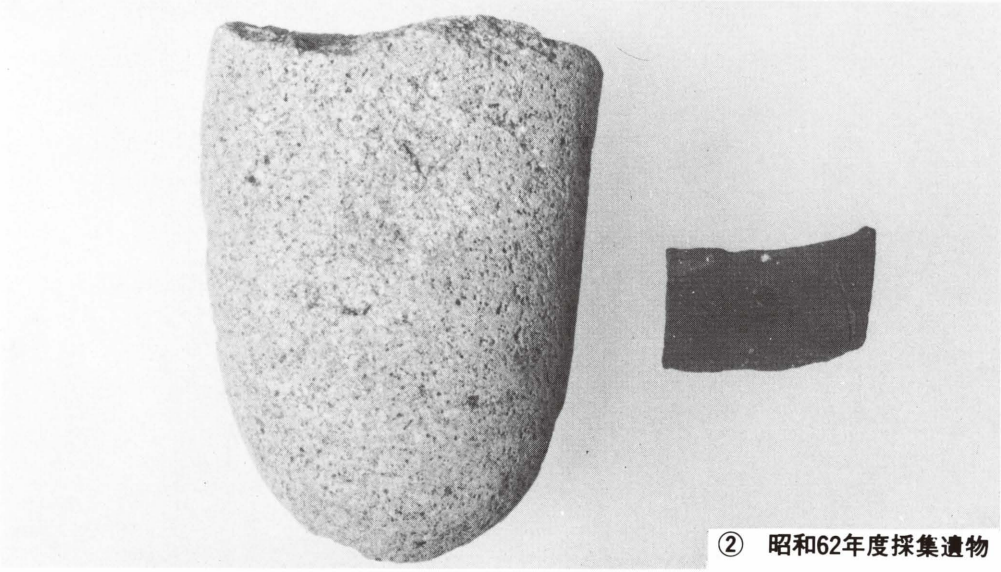
② 長竿遺跡近景(東から)

図版10

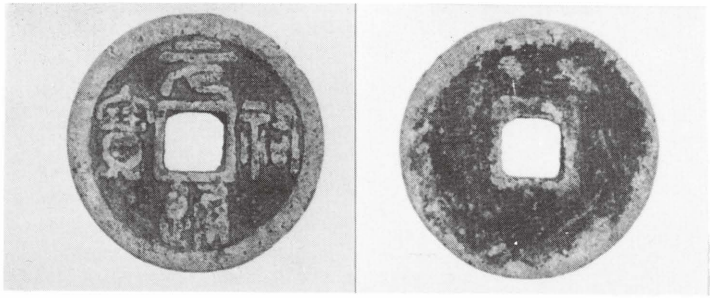
① 長竿遺跡第１トレンチ

② 長竿遺跡第２トレンチ

① 長竿遺跡第3トレンチ

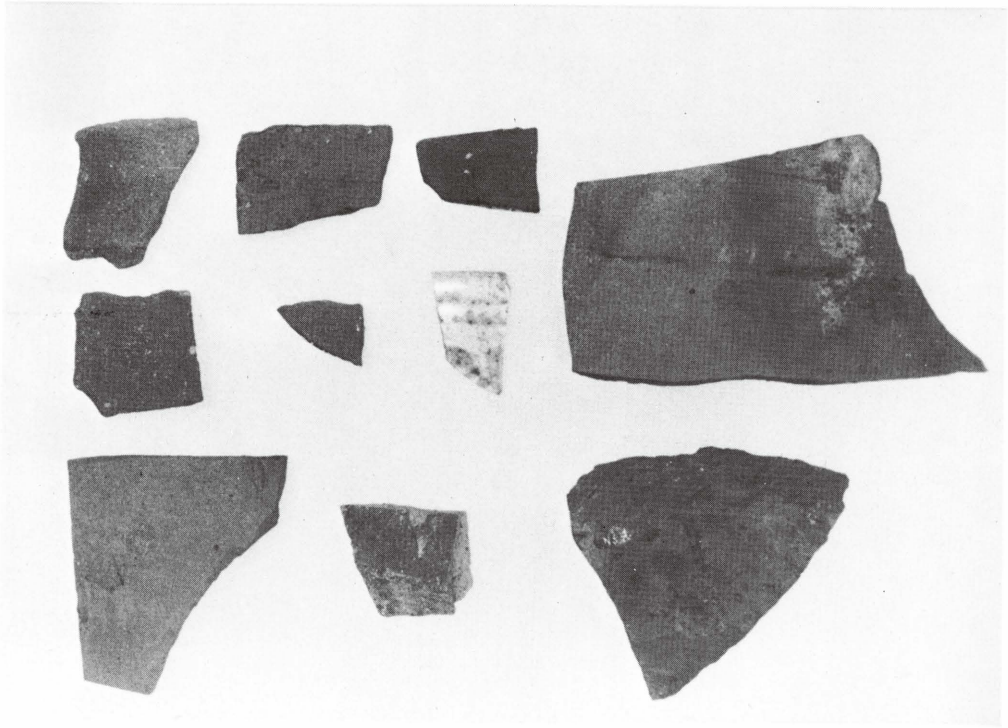


② 昭和62年度採集遺物

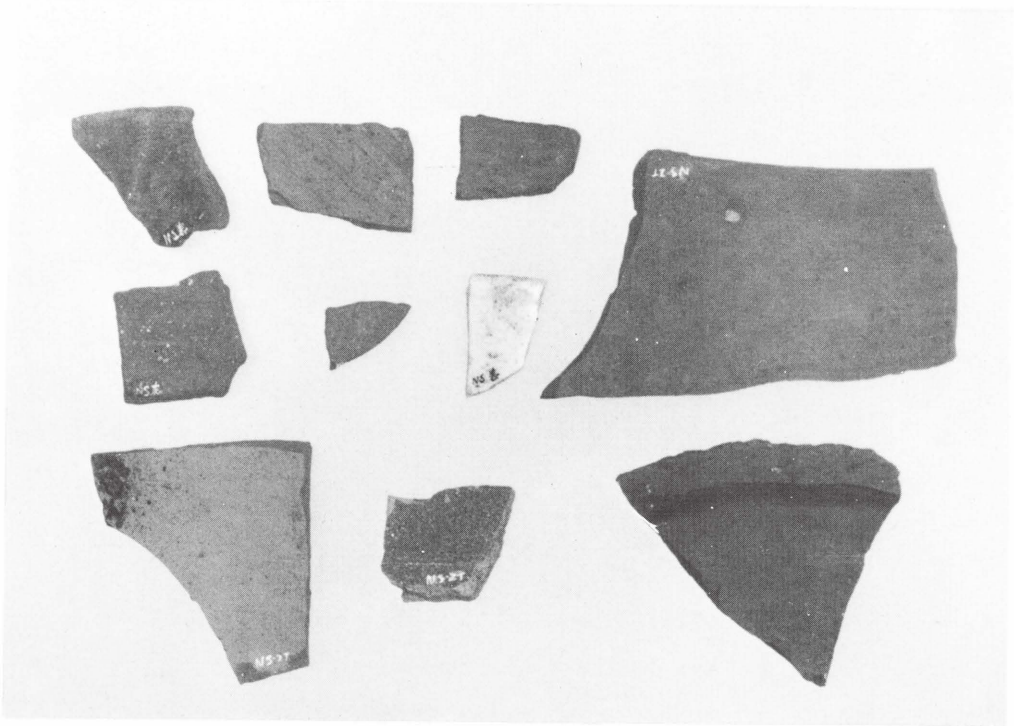


③ 古銭

図版12



（表）



（裏）

長竿遺跡出土遺物

# あ と が き

どこまでも蒼いコバルトブルーの海と紺碧の空、情け容赦なくふりそそぐ灼熱の太陽、夏真っ盛りの７月から８月まで発掘調査は行われた。南の島徳之島の焼けつくような日差しのなかで、真っ黒になりながらトレンチを掘り進めていくが天地返しの為、包含層は削平されていた。

滝のように流れる汗を拭きふき、初めて発掘調査を経験された地元の人たちは、たまに出土した遺物を手にし感激され、１個の遺物から勉強会が始まり、皆無であった考古学知識がふくらんでいった。

このような状況のなか、発掘に従事していただいた地元の方々、整理・報告書作成作業を行ってくださった県文化課収蔵庫の作業員の方々に、心より感謝申し上げます。

発掘作業員

玉江　広延、中水　清隆、上岡　一基、石原敬二郎、向井　武市
北郷キヨ子、上岡みつ子、玉江　秀子、宮村　京子、山口　文子
福原ミツ子、松永ヨシ子、太　リキ子、島　律子

整理作業員

浜田幸江、行船順子

調査メンバー

天城町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）
県営畑地総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財報告書

# 鬼入塔遺跡・長竿遺跡

発行日　平成元年3月30日
発　行　天城町教育委員会　〒891-76　大島郡天城町天城430番地
印刷所　中央印刷株式会社　〒892　鹿児島市春日町12番16号